

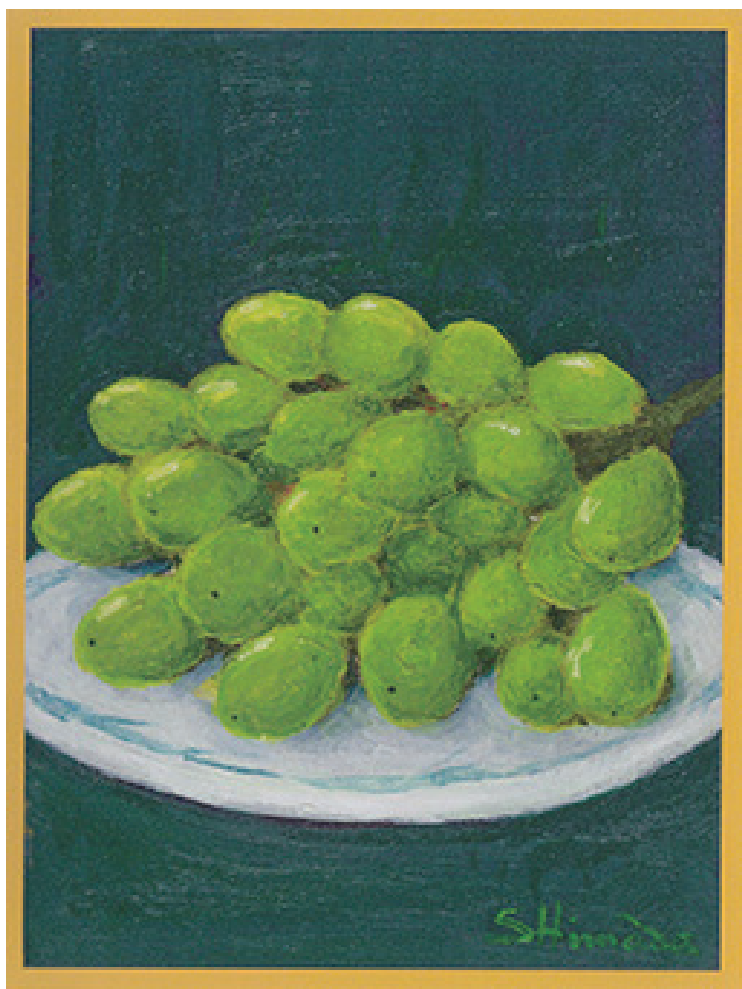
# 冬 雷

短歌雑誌

TOURAI

二〇二六年五月一日発行（毎月一回一日発行）  
第六十五巻第五号（通巻七七一号）

永光徳子歌集『陽だまりの庭』  
（冬雷短歌会文庫031別冊付録）



5月号・2026年

応接室……新作五首

人生ここから

三浦 武



中三の就職組に受業など無くて自習のひと日  
始まる

進学の者に点数くれてやれ言はれて御馳走の  
ラーメン啜る

保身には長けてゐるらし担任は身形しか見ぬ  
唯の小父さん

中卒の就職先にヤクザ系ありしよ友の四五人  
が就く

嫌と言ふほど不条理を見聞きして二度と来る  
かと校門を去る

〈短詩形文学所属〉

2026年5月 目次

〈応接室……新作五首〉……………	三浦 武…
冬雷集……………	1
作品一……………	16
五月集……………	36
作品二……………	44
作品三……………	56
横山季由歌集『今年こそ』を読む……………	桜井美保子…30
三月号冬雷集評……………	桜井美保子…31
三月号作品一評……………	小林芳枝・藤田夏見…32
誤植・校正をめぐる雑談……………	高橋輝次…34
三月集評……………	鈴木やよい…40
三月号十首選（冬雷集・三月集）……………	41
三月号作品二評……………	井上菅子・江波戸愛子…42
大友柳太郎歌集『渚』鑑賞 補記②……………	大山敏夫…52
三月号作品三評……………	山本三男・橘 美千代…54
歌集 / 歌書御礼……………	編集室・佐藤靖子…61
三月号十首選（作品一・作品二・作品三）……………	63

表紙絵 《シャインマスカット》 嶋田正之 / 題字 田口白汀

# 冬雷集

江戸木挽町

桜井 美保子 神奈川

老いてなほ映画好きの血が騒ぐ見逃したくなき一本がある  
一瞬に赤き振袖脱ぎ捨てて白装束となる若き侍

父親を討たれたる者その仇うたねばならず武士の掟は

仇討ちの成し遂げらるるか戦ひは雪の降る夜の芝居小屋わき

封切りの二日目に見る「木挽町のあだ討ち」原作を読みたくなりぬ

仇討ちにかかはる謎が少しづつ解かれゆくさまにぐんぐん引かる

江戸庶民の芝居好きは後の世の吾も受け継ぎ楽しみを持つ

歌舞伎座のあたりが江戸の木挽町行つてみようか歌舞伎でも見に

東銀座に途中下車して少し遊ぶ歌舞伎座地下の木挽町広場

赤間 洋子 東京

好きなことのひとつは黙々と歩くこと国分寺探検まだまだ続く

死ぬ日まで寝たきりになんてならないぞ楽しく歩きけふ一万歩

がんばらず楽しく生きよう九十代子らは静かに見守りくるる

ウォーキングの会いつも師につき先頭を話聞きつつ歩くが楽し

この歳になりても歩ける幸せを噛みしめて歩き体操にも行く  
料理好き食材買ひて煮炊きする高血圧なれば塩分減らし  
物忘れひどくなりきて困りたり歳の所為だと諦めきれず  
讚美歌を朗々と歌ふ人がをりわれもつられて声張り上げる

兼目 久 栃木

あたたかい日を待ちわびる日が伸びてきさんと照る吾を照らして  
契約の実態は分らず150億円日本にもテレビ映像許されず  
WBC野球大会大谷選手は一番打者と活躍したり

遅い春とは感じずにはみられない寒い寒いと言ひて求める春を  
冬を越すキャベツの味噌汁やはらかしうまみのあるをみそ汁に思ふ  
総人口14億人が選びたる代議員千人人数多しも(中国)

遠き尾根と近き尾根が重なりて見ゆ帰りの運転操作中に  
晴れた日に見ゆる筑波嶺の南東に筑波山は二つの頂を持ってり

森 藤 ふ み 東京

福寿草の花に見入ればボランティアの見てくれてありがたうの声  
福寿草育ててくれてありがたう我も返しぬ御礼の一言

朝のニュースに蔵前神社の桜とミモザの花の盛りが映る  
大江戸線降りて歩けば程なくて蔵前神社の前に着きたり  
広からぬ神社の境内人あふれスマホをかざし上見て歩く

古木なる桜の枝の広がり境界内超えて歩道に延びる

桜より少し離れてミモザの樹伸びたる枝に黄の花輝く  
一枚に桜とミモザ写したくスマホをかざし人の後ゆく  
人とビル桜にミモザ一枚に曇りの空も入れて撮れたり

身を退く

櫻 井 一 江 東京

容赦なくブルドーザーにて片付ける風景そちこち続くこの街  
片付けてしまへばスッキリするのにと聞く耳持てど一歩進めず  
「捨てに捨て」簡単瞭片付けの極意としつつヤンハリ受けつ

これからと言ふには既に遅すぎるなれど生きてる今を生きねば  
手作りの陶器に描きし新婚の思ひ思ひの言葉の可笑し  
思ひ出を語り合ふ人の在らざれば来し方つなぐモノのこゑ聴く  
次々に親しき人を見送りて遣りしモノにエール求めむ

断捨離も終活・老活・目に耳に入りくる昨今ブームの如し  
まだまだと言はるる内に身を退くがわたくしなりの役の辞し方

有 泉 泰 子 山梨

窓の外子等の声なく静まりぬ一人歌ひぬ雪やこんこ  
雪とけて庭の椿の花のぞく大きなつぼみほころび始む  
おめでたう今日は末孫の誕生日父母の背丈越えサッカー選手  
仕事休みつきそひくれたる娘と共に物忘れ外来とぞ列に並びぬ

迎へくるる医師の笑顔に我もまた笑顔で答へ肩の荷軽し

青木初子 神奈川

朝の予報マイナス八度に防寒を怠り庭の花ばな凍る

寒さには吾も耐へえず花ばなよごめんなさいね春を待ちみむ

低温に弱いと思ひみしサボテンに傷みのあらず発見あらた

大方の葉は凍て付きて緑消ゆクジャクサボテンに新芽出るかな

南向く軒下に置くセラニウム今朝の寒さに花と葉萎える

昨年の暑さに耐へたる芍薬の出でる葉の先蕾のあらず

朝と昼の気温差あれど日射し伸び花の芽の出で子株にならず

橋本文子 鳥取

週一回通ふりハビリに参加する大型画面床の間にあり

高齢者の楽しみ方も工夫され二班に分けて漢字のクイズ

私の班クイズに勝ちて何となくほほゑみ交し心おごらす

大山のふもとのなだり一面に河津桜の丘の公園

山肌に白雪残り河津桜その花色に心をどれり

吉田綾子☆茨城

落葉敷く坂道登れば懐かしき放牧場の大地広がる

放牧場の広き跡地に我が植えし河津桜は大地を覆う

両の手で杖を握りて仰ぎ見る花の間にみどり葉のぞく

満開の河津桜に癒さるも生い立つ繁縷に杖の捕らわる

西方に植え在る杉の木立より飛び散る花粉桜に及ぶ

圧倒的な白木蓮の花の数春日うけつつ大空支う

春らしき陽気に安らぎ庭巡る義母の好みし芍薬芽吹く

中村晴美 茨城

隣接の南側に動きあり売地情報ネットから消ゆ

県営の植物園の改装す民間委託の施設加はる

温泉と地元食材のレストラン植物園の様変はりする

寒きなか植物園を散策すミツマタ黄色に可憐な花あり

集団の鳥の騒ぐが聞えくる隣家の木の实貪りてをり

骨伝導の集音器を耳に掛く集中なくとも自然に聴こゆ

バイク音幹線道路のけたたまし春の陽気に更に数増え

酒向陸江☆東京

クリスマスローズの大きな葉にも雪芽吹いたばかりの花芽にも雪

東京の雪はまたたく間に消えてカラカラ燥く花壇に水やる

七人の兄弟会は年一度平均年齢七十七歳

戦争を潜り抜けたる三人と豊かに育ちし四人の弟妹

兜煮を上手に食す兄達と末っ子夫婦は一箸二箸

体調を憂える長兄に妹の「百歳までは!!」と大きな声飛ぶ

合唱曲「フィンランディア」を歌いつつ平和を祈り涙こぼしつ

山口 嵩 福島

二月なかばはや現るる種まきうさぎ秋の稔りは左か右か  
種蒔きのころはガレ場に消え去るか種まきうさぎも戸惑ふ寒暖  
三月になりて降りくる朝の雪種まきうさぎは再度雪下へ  
米寿まであと半年となる今の楽しみ此れから先づはジョギング  
人生の喜怒哀楽を「他愛なき」ことと思へる歳となりしか  
種を蒔くドローンもさつと変身しもたらず戦禍は常に民らに

東大寺・修二会

天野 克彦 大阪

踏み鳴らす「練行衆」の杵の音南無観自在のこゑのたかまり  
砕けよとその身投げだす若き僧五体投地のその凄まじさ  
その時を待つ人満ちて二月堂凍える体を足踏みしつ  
籠り僧大松明を振りかざし堂上目指し石段きざしのぼる  
天も地も火炎浄土とおもふまで大松明は回廊走る  
群衆へ夜空へ舞へる修二会の火ころの闇を焼き払ふごと  
「水取り」の火の粉を掃くも行ならん紙子の僧の煤にまみれて  
天平の御代より続く「お水取り」修二会の僧の佳き顔見ゆる  
火の粉浴び修二会警護の警察官火の粉浴びるは役得ならん

高松 美智子☆ 栃木

梅褪せて辛夷の白にちから満つ川面にひかり揺らして三月  
白梅に遅れて盛る紅梅の参道をぬけて受験の親子  
生まれ来る孫も老いゆく母もいて我のめぐりの季節は移る  
ほろ苦さ身体が欲す芽吹きどき菜の花のひたしはことさら旨し  
寅の日と一粒万倍日が重なりて宝くじ売り場に人は途切れず  
読み返し響く一首も変わりたり五年の歳月重ねたる今  
「いつでも来てね」の言葉に甘え友の家マッサージチェアに背中ほぐさる

高橋 説子 栃木

立春を過ぎてこの冬初めての雪積もる庭に暫し一人立つ  
塀の外までも這ひ上がるエネルギーをもう誉めたくない初雪カヅラよ  
吾に二度照れずに手を振り自転車スピード上げる登校男子  
「手数料が安いですよ」とATMを指す局員は払込票を戻す  
窓口の人の手借りず会話せず機械操作に年会費納む  
体調の戻りたること実感す目覚ましオフでもいつもの時間  
こむら返りすること無しに目覚むれば朝の光の柔きいく筋  
割れるとき放射状にしぶき放ちしやぼん玉消ゆ虹を残して

大塚 亮子 東京

夢見る事めつたに無かりしわれが今日明け方に見る後ろ手の父  
逃げ遅れ私の分まで父の拳固貫ひし姉にいつも謝る

ふる里を離ることなく最後まで父の面倒見てくれし姉  
父逝きて幾年ならむ今年の盆は墓参に帰らう姉を誘ひて  
五年ぶりに会ひたる友の変らずに元気な様は唯只うれし  
次に会ふ時まで元気でゐようねと指切りげんまんして別れたり  
角曲がり見えなくなるまで見送りぬ友の姿の老いて小さし  
次に会へるはいつやと思ひ遠ざかる友に手を振る背伸びをして

梅の香

嶋田正之 埼玉

春一番枯れ枝に鳴りカラス啼くそんな具合に祝日の朝  
道外れ梅の香りに近づけば先客としてメジロの番  
逆さまに枝につかまり蜜を吸ふ辺り窺ふ真剣な目  
目に見えぬ梅の花粉の飛び居らむ離るる折に香の際立てり  
殺さるる菌と同時に失はれゆくものあらむ大切なもの  
隠れたる菌の仕業か必要な物を買はずに酒をひと瓶  
描きたる絵の気に入らず塗りつぶす左様に為らぬ現実もある  
メールにて結婚式の家内状かうして紙の文化薄らぐ  
久々に履く革靴のこの硬さサラリーマンの時代遙かに

江波戸愛 子☆ 埼玉

戯れにふれたる君の手をさする細く冷たい君のその手を  
もういいと言いてわが手を離れ行く君のその手を追いたい今日は

大き声出して私を叱りいる君のその声聴きつつ嬉し  
鮮やかな色をいくつか組み合わせ高さ違えて風ぐるまあり  
大きめの鉢にさしたる風ぐるまひとつふえたり日曜の午後  
原型をとどめぬ速さにまわりいて止まるも早し庭のかざぐるま  
ゆっくりと回っていたる風ぐるま速さ増したり輝きながら  
冬枯れの庭に置きたる風ぐるま君と見ている君の側にて  
大声に吾を呼ぶ声君の声すこし聴きいて足早にゆく

稲田正康 東京

一年が早やもめぐりて壁にある松と写楽は去年に同じ  
二月の鬼三月の雛また変はらず月づき置きて早くすぎゆく  
歩行器といふが来たりて試してみるこれにも慣れがあるといふこと  
歩行器といふが来たりて病院の平らな廊下と歩き方違ふ  
躰重が腕にかかりて疲れつつ使つてみねば判らぬひとつ  
歩行器に歩めばのぼり坂ありて押すといふこと別に加はる  
葉なき枝大きくゆれて北の風つよくなるらし晴れたる午後に

橘 美千代 新潟

ブラインドより入りくる日差し春のやう三週間まへは氷点下なりし  
笑ひ顔の赤児の頃の娘に似て声立てわらふに疲れ癒えゆく  
何見ても目を輝かせ歓びにみちみてこんな頃もありしか

よく笑ふ赤児なりしよかつての娘おもひ出し胸の塞がる思ひ  
急に気温上り二月すゑ白鳥ら北へ去り湖に残るは鴨ら  
寒波再来風の凍てつく湖にデコイのやうな鴨らが浮かぶ  
抗がん剤の眼の副作用の母のため人工涙液買ひに夜のドラッグストアへ

ブレイクあずさ☆ カナダ

傷つきておびえる子犬を抱くガザの男の子にもはや帰る家なく  
テレビよりガザの痛みの飛び出せばただ飼猫を抱きしめて泣く  
春を待つ心を壊し毒の雨降らせるミサイル今日も明日も  
朝に手をふって登校したつきり二度と帰らぬミナブの子供  
アメリカの植民地ぞと誇られる悲しき日本わたしの日本  
寒空に声をあげたる人びとの光の波よファシスト追い出せ  
イランへの攻撃支持せぬ声高しどの国よりも高し日本に  
イラン国旗なびかせ進む車ありクラクションにてエールを送る

中 村 哲 也 宮城

用も無き日に休めとの催促に若き頃との違ひを思ふ  
同僚の負担を思へば有休も午前と午後に分けて取得す  
気が引けて年次有給休暇のみ休むは我ら五十代のみ  
青空のもとに平日陽を浴びて停留所に立つ不思議な気持  
近隣の病院前の駐車場満車なるかな朝九時なのに

二年以上記帳無ければ窓口の対応となり少し恥づかし  
平日の思ひの他の雑踏に年次休暇の取得義務終ふ

飯 嶋 久 子☆ 茨城

今年また白鳥の訪れありときき急ぎ見に行く三〇〇〇歩ほどを  
時間差かいくたび行けども白鳥に会えず帰る往復六〇〇〇歩  
車輦にはラッピングされ走る電車観光客ら「かわゆい」と笑む  
九十歳を筆頭に超高齢者四人組偕楽園梅を見に行く  
大げさな予報に二の足ふみたるか観光客まばらな庭園めぐり行くなり  
いつもより香りただよう庭園をボランティアガイドにつきて四十分

鈴 木 やよい 東京

雪国の厳しき暮しを思ひつつ我が家の雪かき短く終へる  
春くれば咲くと思ひて来たものの地はならされて梅の木は無く  
壁紙にそのまま残るつめとぎ跡懐かしけれど張り替へを決む  
正月もふた月過ぎて帰りたる息子と話す早口になりて  
夕闇に桜は黒ぐる枝伸ばし固き花芽に力を秘める  
火渡りに焚き上げらるる撫で木なり名前と歳を丁寧を書く  
先見えぬ世界にありて擬宝珠は今年も芽を出す土押しかけて

山 本 三 男☆ 群馬

市街地を流るる川に鴨ら居て上の橋には車行き交う

暖かき二月の午後に出掛け来て日々草の種を買いたり  
腰痛は歩きまわればじき治る痛みはあれど散歩に出たり  
白鳥は川に水面を見詰めて餌探すらし生き物のゆえ  
この辺りを縄張りとするムクドリか啼き交わす二羽時折に来る  
快眠とラベルに記さるる飲み物をスーパーで見ても買わず買ひぬ  
豊田市のビジネスホテルに眠りいる夢をいまだ見ることのあり  
勤めより帰る息子のドア開けるいつもの音をこの夜も聞く

飯塚澄子 東京

二月末金曜の午後曾孫はなす雛祭りの壇飾りつけをば  
小学五年の友の二人を誘ひ来て八畳間にて人形出だす  
曾祖母の我れ気の付きて昨年写真を捜し曾孫に見せる  
完全に雛飾り終へ五年生の女子らに曾祖母の渡すチョコレート  
月一度土曜の昼に亀戸で詩吟指導をなす私なり

秋に区の文化祭に出る年配者まづ吟詠の指導反復

学習を終へて帰宅の生徒らの丁寧なる辞儀笑顔の挨拶

野村 灑子 千葉

家へ帰ると裸足の老人が下着のまま荷物をかかへ廊下を歩きぬ  
看護師の四、五人が老人を囲み「あなたのお家は今ここです」と説得す  
自分の責任で行動できた普通の事が今はしようとしても体動かず

再びの便意くる迄待てといひ又も腹のベルトの鍵かけてナース去る  
ふた言目には「ここは病院です病院の規則に従つてもらひます」といふ  
ベッドより寝返りうちて落ちたれば四角い柵に囲まれて寝る  
便意ありても許可なくば便所にも行けず看護師は最後迄我に付きそふ  
前の通りは湾岸に沿ひ館山迄伸び澄みたる朝は白き富士仰ぐ  
病室を囲ふめぐりを二回歩めば百二十メートルになるを車いす回す

田端 五百子 岩手

散りつくすまでの枯葉を今日も掃く掃かぬで置けぬサインポール前  
たちまちに過ぎゆく一日縫ひかけしままの丹前また畳みけり  
短日や日暮れ一氣に早まりて湿りおび来る竿の洗濯物は  
牡丹雪張り付く窓を振り返り咄嗟に為すべき事を忘れる  
温き陽の射し来て雪庇落下せり「どどつ！」地震か家の震へる  
小春日の縁に蒔の小豆選る媼の肩に虻のまつはる

戸部田 とくえ 福岡

それぞれに見事に育つ冬野菜堆肥をかかさずまたいつくしみ  
めづらしく鶺鴒の声そばにして意外な近さに戸惑ふばかり  
豌豆のやがて花の咲く頃と乱るる蔓を支柱に沿はず  
ひよつとこの仕種に誘はれこの上なく愉快になりて朗らかに  
花言葉慈愛とききて尚更に金盞花かかせぬ庭となりたり

朗らかに思ひ直して前向きになれる己を暫し寂しむ

江 藤 ひさ子 大分

「少し歩かう」夫の誘ひに即立ちて携帯電話と杖の用意す

大分河畔を歩き交ふ概ねは女子ふたり男女のペアと和めるすがた

弁天大橋から舞鶴橋までの七百五十メートルけふの歩行はそれの往復

日々の歩行は距離より開放感されども距離が伸びれば満足

施設の友に電話すれども反応なし娘さんにその旨電話

爽やかな声に安堵すその声に施設の生活の安泰おもふ

稲 津 孝 子 福岡

冬の風にあらず暖かき春の風にあらぬ風ふく今日は啓蟄

日の翳り寒くなりたる門柱の国旗を畳む天皇誕生日

漕ぐ事のできず地面を交互に蹴りてゆく子の自転車を追ひてゆく母

「梅一輪一輪ほどの暖かさ」友の教へてくれにし嵐雪

眼つむりてこれが魑魅魍魎といふものか病ひの眼の中の漆黒の闇

向かう側に回せば足し算手前側は引き算の機械で実験しにき

白衣着て化学の実験せし頃あり硝子器具屢々毀したりして

長崎の対馬に獺見つかりぬ昭和五十四年四十川の最後の足跡

学生運動騒然とせしころ謝恩会に仰げば尊し歌ひし女子の学生

姉 川 素枝子 福岡

万葉の散り敷く道に裸木の樗の並木冬らしくなる

灯籠に積む初雪を久方の天の恵みと言ひつつ立てり

古里の吾と寝むとて娘きて息子が布団並べて敷けり

をさな子の娘と寝しより幾十年今宵は枕ならべて眠る

あの世にも家があるよと母いひて納骨堂を求めくれぬき

右ひだり娘息子に手を引かれ寺の砂利ふむ納骨堂へ

手のひらに包めば冷たき母の壺待たせてゐるねと声かけてをり

母よ母よ焼け野の雉子きぎすのごと呼べば母の声する胸の奥どに

井 上 楨 子 新潟

家めぐる伸びたる杉の幾本か切れば初日は幅広くさす

去年よりも着膨るる寒き日々なれば暖房過剰のブレーカー落つ

新潟の冬空雪の日々にして暖気に氷柱が窓外塞ぐ

風雪の止みたる夜半の窓越しに裸木の上の月際立てる

異常なる今年の雪に黄ばみたる『北越雪譜』を取り出して読む

雛鳥を伴ふ雉子が雪道に餌を掘るさまにブレーキを踏む

雪止みて墓を気遣ひゆく老いの標かんじきの跡を鴉が歩む

雪壁の高き道辺に見え難き弟の家を探して走る

井 上 菅 子 山形

ちかちかと瞬く寒の定位置の星座に流転の一つあらずや

一目二目ごまかして編む前身頃わが生き来しに似てこれよし  
北の海の潮に揉まれ肉厚の昆布に巻きぬアメリカ産にしん  
松切ればねちねちとして松脂は手の平につく松は執念し  
横文字の介護施設の車来て乗せられてゆく日本の老人  
日当りの枯生の赤猫飼ひ主はをるやをらずや案じて帰る  
どこも痛まぬ一日であればそれでよし水の涸れたる鉢に水やる  
成長の止まる観葉植物と院内の空気少し分け合ふ  
おもしろいところは何かわからずに終はつてしまふテレビのゲーム

## 作品一

小林 芳 枝 東京

勝利と勝子がクラスに二三人居りき昭和十九年生れの吾等

小林さんと親戚かもと言ひながら見たりき九十九里浜の写真集

荒波の底に住みゐる貝だから大事に食べよと言ひたり祖母は

九十九里浜の沖に沈みてゐる貝を命を懸けてとるのだと言ふ

ながらみと呼びて親しむ浜人にダンベイキサゴと言ふ人をらず

オフィスにながらみの貝飾りゐて社長及川隆彦氏居りき

「ながらみの及川さん」と声かけて来る人あらむ未来の世にも

永 光 徳 子☆ 東京

春うらら見上げた空にオスプレイどこへ何しにと問いたくなりぬ

悠然と巨大な機体の飛ぶ様をただ眺めていた以前の私は

ニュースでは中東問題伝えたる此の惨状の連鎖恐ろし

春半ば桜前線の子報ありこの平和感続くを祈る

春風に高尾の山の杉花粉難儀してるが杉を憎めず

終戦後「お山に杉の子植えましょう」と歌わされしは遠き思い出

正 田 フミエ☆ 栃木

雪被り庭の紅梅咲きており花の健気をつくづく思う

雪の朝ゆきを被りたる紅梅の花あかあかと輝きを増す

早春にオオイヌノフグリ青い花畝に咲き継ぐを惜しみつつ抜く

三月に入れば直ぐにトマト種をポットに蒔いて発芽を楽しむ

種まきは初めトマトにピーマンと茄子レタスなど浮き浮き三月

冬草の草取りせんとするとき助っ人来れば鎌を渡しぬ

助っ人の草取り早く冬草は山と積まれて根こそぎニラも

発芽したトマトのポットわくわくと徒長防止に日向に出しぬ

齊藤 トミ子☆ 栃木

母ゆずりの鬼おろしもて大根をおろしておりぬ「しもつかれ」にせむ  
鮭の頭圧力鍋に煮ておれば部屋中に籠る魚の臭い  
幼き日嫌いでありし「しもつかれ」今好物で時どき作る

義弟に妹と我れ付き添いて医師の話を逃さじと聞く  
骨に転移一つ認めると医師の言う目を伏せ静かに義弟は居る  
早くても手術は四月梅や桃桜の花見に義弟を誘う

大晦日今年も来られた湯の宿に妹夫婦と乾杯をする  
バイキングにおせち料理も少し有り何にもせずつに食める仕合せ

倉浪 ゆみ 埼玉

五位からの逆転優勝利とうれしペアのフィギュアに拍手万雷

新しき種目もふえて雪上と氷上における熱き戦ひ

赤色は日本チームのユニホーム毎日をどる新聞紙上で

逝きし子の使ひ続けし辞書ありて片方におきて我も使ひゐる

父親を亡くした孫達元気らし笑顔戻りて我は安堵す

女孫達と一緒にすごすひひなの宵何よりうれし笑顔笑顔が

今年是我八十二歳となりますますうから族の長にも成りて

白木蓮の花芽は日毎にふくらみて薄ずみの空に鉾のごとく

大丸用水

林 美智子☆ 東京

二階より雨戸を繰れば目の下に止められていた用水流る

冬の間の枯葉も芥も洗われて今朝キラキラと用水流る

江戸初期に灌漑用に掘られしも昭和半ばは生活排水路に

下水道整備進みて多摩川も大丸用水も清流となる

我が家の並び八軒は南北を大丸用水に挟まれて建つ

用水には鴨が泳ぎて白鷺来てたまさか瑠璃色のカワセミも来る

我が家族水に囲まれて日々暮らし祖父のお陰と気に入りており

かりんの木紫陽花の枝芽を吹きて弥生半ばの日差し柔らか

松 中 賀 代☆ 高知

この橋を渡れば友の家は直ぐ洗濯物がはためいている

久々の雨に潤い紅梅も枝の先まで蒼ふくらむ

赤い実を風にゆらせて小鳥待つヒヨやメジロは何処に行ったの

どの家も赤い実がつく南天や数多の庭木に小鳥が寄らず

日暮れより風強くなり突風も止む事はなく夜明けまで吹く

本 郷 歌 子☆ 栃木

梅桜桃と切りし庭に春は来ぬと思いたる我の浅はか

そこここに紅や緑の芽の出でて春は正しく庭まはらに來たれり

両親の齡を越えて生きる我肩や手足に故障のいでて

小春日和の廊下に立てば日向ぼつこの祖母の背中の面影浮かぶ  
すれ違い見覚えのある人なれど海馬働かずついに名は出ず  
一年の娘の無事を感謝して緋毛氈に雛様飾る

大木を二本切りて風の音やさしくなりぬ北風の口

『ミラノ・コルティナ五輪』

村上美江 岩手

デザインや建築彫刻音楽も色彩全てセンスの光る

「イタリアに行った」と娘は寺院見てテレビを指差し異国談話を  
海外に七年暮らし苦楽越え掴むメダルの「りくりゅう」笑顔

四分のこの一瞬にどれ程の犠牲のあつた「りくりゅう」ペアか

ジャンプするスケートの角度そのこともピッタリと合ふ「りくりゅう」ペア

相性の良さは全部でなくたつて何か一つの思ひで叶ふ

スケートを涙で応援初めてのフィギュアスケート「りくりゅう」ペアに

本当の英雄見たり平野歩夢「生きて帰れて」世界一なり

伊澤直子 ☆ 東京

ピアノチェロ小山実稚恵と宮田大生で聴きたる深き音色

演奏の楽器はストラディバリウスという名を聞くだけでグレードの上がる

ラフマニノフの甘き旋律にひたりたり豊かな気持の幸せコンサート

美容室紹介されて行ってみる近所にあるに知らずにいたり

美容室洗練された室内は都会にありたるごとき雰囲気

仏壇の花を庭から選びくる沈丁花の香りに母の声聞く

春の雪杏の梢に舞い落つるを娘と語り窓より眺む

乾 義 江 ☆ 茨城

何回となく投票日は雪とニュースあり声に押されて市役所に走る

わが里の彦根城下に秀吉の城の痕跡展示明白(テレビ)

我が微睡む居間の硝子戸叩く人コココーラ持ちて隣家の主

独り居の苦しい時の神頼み頼りの主は農学博士

素晴らしい木原三浦のフィギュアペア目にする度に心揺さぶる

春隣河津桜のほころびて庭の草木も芽吹いておりぬ

義姉上に鮎寿司送ると姪に言えば大腿骨の手術を受けたと

土地低く和洋水仙芽を出して風に揺れおり夕影のなか

夕餉が巡る

松本英夫 東京

彼方なる若草山の山焼きを自宅より見き身重の妻と

妻と別れそれぞれの道を歩みしもばつたり会ひたるマンション入口

ペランダの手すりの黄ばみ今日もまた「室内干しね」と妻のこゑ沈む

ヒビスカス赤く大きく咲きたれどひと日と知りて妻の肩落つ

新聞に目をやりつつもうつろなり妻の頭を夕餉が巡る

ばあさんは洗ひに精出しぢいさんはさうち水やりそれぞれの朝

起きるなり今日の予報を妻見つむ洗ふか否か梅雨近づきぬ

三時間パーマにかけるわが妻の美への姿勢八十になりても

大塚 照 美 兵庫

娘と孫つるる上野の動物園にて本物のパンダ背を見しままに  
刃物の町三木市より来し研ぎの人すがたを見せずコロナの後は  
ハーモニカの授業にいささか手こずりし次男のギターは全て独学  
帰省中も仕事ありとふ長男を階下より呼ぶ昼食時と三時  
田畑でんぱのまなかの「道の駅」に買ふ蒔草旨し冬場はその根も  
改装せる食事処の新年会「続きたいね」と三たりと乾杯  
窓のそと雪は斜めに降りてゐて木の葉に積む雪かぜに散りゆく  
寝る前に水揚げしたるガーベラの五色がすつくと今朝の食卓

三 好 規 子 福岡

石畳のゴツゴツ歩きにくき道の両側に並ぶ長崎土産店  
坂道や階段を「転ばぬやう」子に声掛けされつつ大浦天主堂へ  
京や堺より長崎へ冬歩き護送されし信徒二十六人の処刑  
十二歳から十四歳の少年三人も怯まず殉教す凄き信仰  
看守役の二人が道中信徒になり二十四人と共に処刑されたり  
稲佐山のS字カープを登りきて展望台に見る海や島市街地  
大地震なみ後いえ再建に八十八の父はコレクシヨンの絵を処分したりき  
父持ちし藤田嗣治の「女の顔」の面影うかぶ三十年過ぎてても

愛蔵せし小磯良平の「赤服の少女」の絵の写真を父の棺に入れき

須 藤 紀 子 埼玉

杉花粉雨に洗はれその上にまた降り積もる春の愛車に  
半月も遅れて出たよと弟が露の臺摘みて畑より持ち来  
別棟のシャコバサボテンの水やりを気にして半月足の痛めば  
里山の斜面に桃の花咲くを最後に母と見しより十年  
ゼラニウムに名をつけ声かけ世話をする我を見てゐる写真の犬が  
この空をミサイルの飛ぶ日は来るか鴉は今日も山へと帰る  
知らぬ間に街にミサイル置かれあり知らぬ間に誰かが戦を始む  
後の世に残すべき資源を事も無げに失ひてゆく欲望のため

佐 藤 靖 子 東京

押しつよきリフレイン演説他の党の議員が真似ぶ恥づかし気なく  
しりとりでトランププーチンつながりて世界ますます暗くなりさう  
けふの朗報関八州はすべて雨あゝの薄き雲にて用の足せるや  
菜の花の仲間と分かるまで伸びて葉牡丹いまや蕾をもちぬ  
指の腹一文字に切り血のあふる切腹の痛みはかり知れずも  
レントゲン写真歯並び恥づかしく横目に見ては目を背けたり  
名指ししてデュオリングが嫌味いふ「もう飽きたのね」うるさいなあ  
どうかして失せもの見つけ偶然は必然たるを実感しをり

日の落ちて富士の際立ち見ゆるころ富士を語りぬ散歩の人らと  
富士山の見ゆるところに住むひとの朝の富士山一番と言ふ  
スマートフォン朝の富士山納めたる写真幾枚見せてくれたり  
常ならばすぐに目指してゆくベンチひとの影あり回り道せり  
名にし負はばいざ言問はむと歌はれし都鳥とはユリカモメらし  
アーモンドクッキーの価格を比べ買ふこのスーパ―は四十円安  
昨日より三十円高の表示なりガソリンの値よ戦争やまず  
一本のボールペンの芯届きたりネット通販宅配無料

鈴木計子 東京

青空に白き線引き下降する機の方角に入間基地あり  
デパートの屋上舞台に並びたるハンドベル持つ手の上下見ゆ  
屋上のにぎはひのなか奏でらるハンドベルの音とぎれ跡切れる  
ひと月を住みにし米沢半世紀経て来たる今日なにもわからず  
もらひ湯をしたる駅前旅館の名記憶にあると運転手の言ふ  
団躰の後に説明少し聞き雨の上杉神社あとにす  
知らぬ町となれる雨の米沢を列車はやめて帰ることとす  
米沢の駅に「牛肉どまん中」買ひ早めたる新幹線待つ

石渡静夫 茨城

豪商の店舗でライブ演奏会人の溢れる土曜日の午後  
バイオリン奏者がリード「ユーモレスク」合はせる二人はクラリネット  
お父さん夫婦旅行は何処がいい息子尋ねる春炬燵から  
車より電車が気楽でいいかなと案じてくれる息子優しや  
蛇沼の広場に遊ぶ子等の声春の日ざしに明るさ増しぬ  
啓蟄と言へども風は冷たくてミモザの花は揺れて重たげ  
意に添はぬ国は力でねぢ伏せるロシアに続きアメリカさへも  
殺戮を平気で行ふ人達よ自分は死なぬと思つてゐるのか

西村邦子 兵庫

月一回十八日は写経の日始めたるは七十路なりて  
須磨寺の門をくぐれば境内の白梅紅梅迎へてくれぬ  
須磨の浜首を討たれし若武者の敦盛首塚小さな社に  
薬剤師の実習始まる女の孫は続く道へと一歩踏み出す  
中三は修了式が卒業と入学式なる一貫教育  
詰め襟から私服になるとふ高校生自由な校風自立の一歩  
野球を続けることを選択す十六歳の春が始まる

植松千恵子☆静岡

青空にピラカンサスの実重そうに鳥がたかりて赤い実は失せる  
困難に負けないというツワブキの花言葉あり力を貰う

孫が言うバアバとババアの新発見一つ動かせば汚い言葉  
高齢の客にタブレット操作させ接客業とは何する人ぞ  
控訴すべき山上被告の無期懲役親選べたら起こらなかったはず  
深き雪かき分け向かう投票所票の重み受けしつかり政策を  
華々しく表彰台上がれずも黙々と励んだ自分を褒めよ

さらば上海 ただいま東京

永野 雅 子 ☆ 東京

解熱剤で翌日すつきり目覚められ朝食おいしくモリモリ食す  
昨日より顔見知りの運転手と会話も弾み空港に到着  
タクシー降り移動しようとした途端娘婿が言うパスポート車内だと  
幸いに運転手つかまり足早にチェックインに並ぶ三十分遅れ  
出発のゲートは遠く地下鉄で一駅乗りて更に走る  
息切らせ着席シートベルト締めるピカリと光る突然の落雷  
離陸待つ間に突然機内食を配られ驚けど黙りて食す  
一時間遅れで離陸し羽田へと無事に到着長い溜め息  
入国のゲート通過しあちこちより日本語聞こえるただいま東京

川 上 美智子 ☆ 高知

わが待てる目白の飛来未だ無く甘き香放つ満開の梅  
何故にメジロは来ぬか寂しさに盛り過ぎたる白梅仰ぐ  
山肌を穿り開けたる横穴に生姜の種の目覚める二月

段畑を耕してゆくトラクター音響かせて春を呼びおり  
雨降らず干し上がる川に捨てられた自転車一台姿を晒す  
自転車のハンドルに止まり日を浴びて川面見つめるカワセミの居て  
川中の浅瀬に集まる小魚を次々捕らえる白鷺一羽

川 俣 美治子 ☆ 栃木

山歩き節分草と福寿草二つひっそり咲き並びおり  
西風の一日止まず吹きわたり空山白し春呼ぶ風よ  
陽に映ゆるデージの赤鮮やかに塞ぐ心の霧を払えり  
置き電話一度も鳴らぬ平穩にがっかりしつぽつぽつとしてもあり  
ブーツからスニーカーへと履き替える三月の今日あたたかき日に  
久々に飾りし立雛三日過ぎて嫁ぐ子なくも早々に収む  
ホームにて向かい合わせに手を振れる卒業式を終えたる若人

大野 茜 神奈川

見舞ひたるいもうとの声のか弱くて聴きとり難くも相づちを打つ  
初雪の正月三日に降り積むは幸先良きと庭に降り立つ  
寝る前に布団に足入れ本を読む僅か十分の私の読書  
会館の設計完成喜びぬ難問の山乗り越へて行く  
来年のさくらの旅は津山城予約も成りて冬乗りきらん  
若き日は競ひて共に働きし友垣二人の訃報が続く

ウクレレを背負ひて団地のクリスマス子ら目の前になどか緊張

小林貞子 山形

一冊で一生涯遊べるかも知れぬ超難問とふナンプレの本  
越冬のりんご程よく酸味抜け甘しと夫はさりさりと囃む  
生菓子の桃の実と花忍ばせて節の祝の荷を送りやる  
薄揚げと茸と牛蒡干し帆立五目蒸しのレシピ聞く孫  
木の洞へ住まふ栗鼠らし枝揺れて瞬きの間に小き影消ゆ  
雪原を木の実探して走りたる栗鼠よ春だよ根回り空くよ  
朝靄の霧らふ弥生の雪野行き芽吹き柳少し手折らむ  
妹は冥き中有を立ちいでてちははの手に今日抱かれむ

本間 志津子 山形

その朝は前ぶれもなくやつて来た言はるるままの入院となる  
リハビリをする大部屋の西の窓遠く近くの街並みに雪  
単調なくらし彩るものならむ未明の放映ミラノの五輪  
中旬を過ぎて静かな陽の光病室に差す日々多くなる  
如月の大阪城の梅林は今が盛りとニュース告げをり  
早朝のテレビ賑はすミラノ五輪十七日経て今日閉会式なり  
灯のごとく小さきもの胸にただひたすらに退院を待つ

高橋 燿子 ☆ 埼玉

持ち物に名前つけるは夫なりショートステイの日も迫りきて  
家にいる言い張る夫もケアマネの体験してみてに納得をする  
後のこと嫁に託して病院へ腸のポリープ切除する朝  
点滴の落ちゆく様を見つめおり動くものなし白い空間  
腸の中映すカメラにポリープを摘み切り取る音パチンと響く  
一日の絶食になる腹抱え届くメールに無事をしらせる  
朝食の五分粥うまし手を合わせ満ち足る心地に退院をする  
友夫妻退院祝いと花束をもちくる優しさわたしをつつむ

野崎 礼子 ☆ 埼玉

六人の学友集えば男のみマドンナとはならず姉さんと呼べる  
健ちゃん博君と呼べば笑みこぼれ上座もなくて席ゆずり合う  
学友の語る思い出一つひとつ脳裏の奥にそつと息づく  
ポランティア役割り徐々に増えてきて現役の日々ふと重なりぬ  
徴兵制ドイツに加速のニュースあり我が国の行方ふと案じおり  
防衛費増えると聞けば静かなる暮らしへ影響の差しくる  
胃が無くも食べれることに感心す夫はオムライス見事に平らげて  
春野菜の赤黄緑を盛りつけて夫の箸またすつと伸びゆく  
一日で三十円も上がりたるガソリンの値やこの先いかに

(☆印は新仮名遣い希望者です)

『今年こそ』を読む

桜井美保子

著者の第十一歌集。七十三歳から七十六歳まで作品が並ぶ。令和四年から令和七年の年初までの六百二十九首が収録されている。第一歌集『峯の上』（昭和四十三年）から本集まで実に五十六年間の作品を歌集に収めてきたという著者。その情熱には圧倒される。

コロナ禍のこの三年に身内三人年々送りき末の子吾は  
横山家の長（おさ）となりてわが並ぶ兄妹（はらから）  
亡き今義兄の葬儀に  
三年続く喪中の我が家に今年こそ禍（みと）  
のなく良き年であれ

年齢を重ねてくると肉親や身内、友人との永遠の別れがある。そしていつの間にか自身が一族の長となっていることに気づくのだ。三首目は歌集名の元となった作品で心からの願いと祈りが込められ

ている。

光秀の丹波攻めにてわが祖は城に火をつけ子らを逃がしき  
テレビによく放映さるる福知山城  
こ横山に城築きあき  
火災に紛れ逃れし城主の長男がわが家に入り今の吾あり  
城逃れわが家に入りし時房の墓は古びてふるさとに立つ

「皆既食」の一連より。「皆既食と重なる惑星食は四百四十二年振り桃山時代のわが祖見たるか」の歌もある。ネットで検索すると福知山城の前身は横山城とあった。作者の祖先と家系、その歴史の重みに驚く。そして今日までの命の繋がりというものを思わずには居られない。

白内障の手術を終へし目に眩しふる  
さと丹波の波打つ青田は  
わが生まれし村の友ら八人の歌会に  
病む足引きずりて来ぬ  
歌評より思ひ出話の盛り上がり幼友達との歌会は楽し  
目の手術後に改めて見るふるさとの美

しい風景、作者を迎えてくれる友らの温かさ。読む側も心が和んでくる。

鳥谷口の古墳の上より望む彼方に畝傍の山の裾を引きたり  
あるかなきかの風に限りなく竹の落葉黄金（こがね）に光り谷へ散りゆく  
天武天皇住みし内裏の跡なるや千三百年経てわが目に触れぬ  
ガイドせし工房跡で鑄造されし富本銭はこれか屈みて見入る

選者としての仕事、短歌の指導など多忙な日々の中、歴史の跡を訪ねておられる。こうした作品群も横山氏の歌の魅力の一つだといつも思っている。

土屋先生の跡を訪ねて越（こし）の国隈なく巡りき妻伴ひて  
妻は吾の愛車カローラのナビゲーター  
助手席にいつも地図を広げて

名著『土屋文明の跡を巡る』の背景が偲ばれる作品。探訪途中の空気感とご夫妻の心の通い合う温かさ。今回の歌集にも多くの素晴らしい家族詠があることを書き添えておきたい。  
（いりの舎刊）

二月号 冬雷集評

桜井 美保子

厳かなる太鼓と祝詞響くなか幼子眠り  
夢で聴くらむ 橋本文子  
曾孫さんのお宮参りの一連より。健やかな成長を祈りつつ幼子を見守る作者。太鼓の音に幼子は泣きもせず微睡んでいるようだ。下句の表現に作者の優しい眼差しがあり、心の温かさがある。  
獅子頭担ぎてをとこふたりくる四条大橋雪舞ふなかを 天野克彦  
新年の京都の情景を鮮やかに捉えている。獅子舞の男達だろうか。邪気払い、厄除け、招福を表す縁起物の獅子頭を担いでいる。折しも雪となった四条大橋。伝統の文化が今も息づいている。

電車にて席を譲られ腰降ろす嬉しさ寂しき相半ばして 大塚亮子  
混み合った電車の中で席を譲られることは嬉しいが、そうした年齢に達した自らを思い、ちょっと寂しく感じることもある。その微妙な心理がよく伝わる。

高齢者集ふピンシャン体操に新参者に  
て参人を決む 嶋田正之

地域に溶け込んで活動するまでにはそれなりの経緯があるのだろうが、この歌では積極的な姿勢で体操の仲間に入っていく作者の姿が明るく詠まれている。何か楽しい雰囲気を持つ作品となった。

夜読む文庫本の文字小さきに夫の形見の老眼鏡探す 飯嶋久子☆  
読書を楽しむ夜のひととき。文庫本の文字が小さいので亡きご主人が愛用されていた老眼鏡を探す作者。年齢を重ねると文字が読み取りにくくなるが、ご主人の眼鏡がそれを解決してくれた。  
朝ごとに庭の紫木蓮眺めみる細き枝先小さな蕾 飯塚澄子  
毎朝、庭の紫木蓮を見ることが一つの楽しみでもあるのだろう。「細き枝先小さな蕾」と弾むように軽やかなリズムの下句である。花が咲くのを心待ちにしている様子。紫木蓮への愛情が滲む。

雨戸閉むる空に昇りてきたる月雨戸を閉めずまた来て見をり 稲津孝子

雨戸を閉めようとした時、ちょうど昇ってきた月の美しさに気づいた。雨戸を閉めずにおいて再び見上げる。月を愛でるひとときを持つという心のゆとりを感じさせる作品である。

米ぬかでゆでたる大根あまみ増すひと手間かけてけふは煮込みぬ 戸部田とくえ  
毎日の家事は、きりなくあるので料理などは簡略に済ませたくもなるが、ひと手間かけた時の料理の美味しさが格別なのは事実。やはり料理を作るにも心を籠めることが大切なものかもしれない。下拵えから煮込みまでの様子が具体的表現で表されていて楽しい。

降雪に激しき風の伴へば地蔵の細き目閉ざさるごと 井上楨子  
雪も風も激しい日にお地藏様は常と変わらず立ち続けている。この寒い日にと真向かえば、お地藏様の細い目は閉じられていたように見えたという。作者の心が捉えた情景である。日頃からお地藏様を大切にしておられる様子が窺える。

晩秋の風に吹かれつつ玉ネギの植え付けすれば水霜来たり 正田フミエ☆  
玉葱も幾つかの品種があり苗を植える工夫が要るようだが晩秋には植えたばかりの苗を水霜が襲うこともあるらしい。早朝に見回りをして対処する一連に作物への深い愛がある。

マスカットあな瑞みぶしそのみどり表紙に載りてにひ年となる 倉浪ゆみ☆  
今年の表紙絵となったシャインマスカットが生き生きと詠まれていて新年を祝う気持が籠められた。結句が印象的で「ひ年」の平仮名がやさしくひびく。

真白なる小鷲飛び来て水の無き用水の底をゆつくり歩く 林美智子☆  
小鷲は鳥より少し大きな全身真っ白な鳥。水のない用水を歩く姿には気品を感じさせるものがあるようだ。確かな写真のなかに様々な空想が膨らむ。  
足の力とり戻すため日に一度外を歩き

ぬ風に押されて

入院中に弱くなってしまった脚力を取り戻そうという頑張りに風が力を貸してくれているような感じがする。歩いた数だけ力が戻ることを信じてたい。

大空と大海原を朱に染めて今年最後の太陽沈む 永光徳子☆

年末を西伊豆で過ごされたようだ。明日から新しい年が始まるという日の夕陽が海に沈む景色には格別な思いがあるだろう。良い年になりますように。

会釈して通り過ぎたる自転車はああ君だつたねもう中学生か 須藤紀子  
すれ違った自転車の青年から会釈をされて一瞬戸惑ったが直ぐに思い出して懐かしむ作者は青年の子供の頃をよく知っているようだ。礼儀正しい青年に語りかけるような下句に親しさがみえる。

元旦に友は帰らぬ人となる遺影の君は照れてゐるやう 石渡静夫  
肺癌の術後に田圃で働いて居たという歌もあるので友の急逝は驚きであったと思われる。本当に驚いたのは君だよ、

と語りかけているような親しさが悲しみをより深くする。

一年の無事を願って合わず掌に日のぬくもりとすみたる空と 高橋燿子☆

初詣には多くの人が願いを籠めて手を合わせる。昨年が健康で幸せだった人も家族や自分が病に罹って苦しんだ人も辛いことが多かった人も年の初めには元気に歩み出したいと願って祈る。下句の大きな捉え方に現在の作者の心が見えてくるようだ。

二泊する孫を引き寄せアイパッド携帯使用の師とする夫 高橋燿子☆  
パソコンやスマホが正常に動いている時はよいのだがちよつとしたトラブルにも対応ができなくなる。孫が来ている内に教えてもらおうという前向きなご主人をやさしく見守っている。

目の前で今川焼を返す手の間一つ入れずひらりと舞わす 野崎礼子☆  
目前で焼いてくれる今川焼の見事な職人技に見とれ、普通なら「ひらりと返す」という場面を「舞わす」と表現した。

成長の証と思う孫の態度祖母の心は時に波立つ 斉藤トミ子☆  
幼い頃に纏わりついてきた孫。思春期を迎えて少し距離を取る態度に祖母の波立つ心。成長の証とわかつてはいるのだ。車からやつと降りたつ吾のこと迎えてくれる隣の猫も 松中賀代☆

長らく留守にしたひとり住む家に戻った姿を隣の猫も出迎えてくれた。顔を見上げて鳴き声も上げてくれたのだろう。ああ帰って来たのだという安堵と嬉しき。会釈して走り過ぎたる自転車はああ君だつたねもう中学生か 須藤紀子  
幼年期からの顔見知りはどう中学生。会えばしつかり会釈も返してくれる。自転車で走りすぎる少年の成長を見守る作者とのほのぼのとしたやりとり。

テーブルのからつぽのお盆の日溜りに猫をさまりぬちよつと叱れず 佐藤靖子

猫は暖かく狭い場所を好む。「このお盆は座り心地が良いのよ 飼い主の匂いもちよつとするしね」そんなふうにすまし顔の猫だろうか。結句が楽しい。

焼きたてが来ますと皿にメモの載る鮎の塩焼き吹きつつ食べぬ 鈴木計子  
最初に出された皿にはメモ書き。『焼きたてが来ます』しばし待って熱々の鮎を吹き吹き食べる満足感溢れる歌。

テーブルに毛糸の帽子置かれたり娘の手編み三日を掛けて 石渡静夫  
お父さんの毛糸の帽子を三日かけて編まれた娘さん。テーブルの上にそれを置いてある。作者のおもはゆい心。

薬局の薬剤師らを目で追ひぬ孫がめざせる姿を重ねて 西村邦子  
今までは普通の場面だったものが、お孫さんの目指す仕事と思えば何か尊さが増して見えて来るのでしょうか。キビキビ働く薬剤師の姿に将来の孫を重ねている。

祝う事の何も無けれど新米のもち米使い赤飯を炊く 川上美智子☆  
小豆の色が餅米に移って艶やかな赤飯

が炊き上がったのだろう。めでたい色に祝う事はなくとも心が浮き立つ幸せな一日だ。赤飯の好きな人が身近におられるのだろう。

パリパリと煎餅を食む音ひびき夫は今年も健やかにあり 川俣美治子☆  
煎餅を食べる音は静かな家うちに響く健康な夫に感謝している。

子と二人時に諍ひ看取りつつ五年目となる年を迎へむ 本間志津子  
ひとつ家に住むということは誰よりも体調の心配とか、心地よくありたいとか思う感情のやり取りはあるだろう。人はいつもいつとも上機嫌ではおれないものだ。五年の歳月の重さを思います。

順番に頭をバクリと嘯む獅子の目力強し金歯が光る 高橋燿子☆  
赤い顔、緑の唐草模様を被った獅子舞は小太鼓を叩く軽快な口拍子との二人連れ、舞を披露して大きな金歯の口にお布施を受けていた。私も恐ろしい口に頭を嘯まれた記憶が蘇ります。描かれた獅子の目に目力は確かに宿っていました。

## 誤植・校正をめぐる雑談

高橋輝次



イ集はいずれも千部程度の地味な代物で、殆ど初版止りだったが、本書だけは類書もなかったせいも、意外に売れ、十一年間で五刷となっている。もっとも増刷部数は少ないので、一寸したロングセラーにすぎないが。売れたのは、物を書く多くの人が体験的に気になるテーマだし、本好きの読書人にとっても好奇心をそえられるテーマだからだろう。

何しろ私は、創元社に入って初めて担当したある語学入門書の奥付発行日を○年□月とするところを○年□年と表記したり、ある和英貿易実用辞典の扉のタイトルの英文綴りを一字誤って印刷してしまい、赤っ恥をかけた編集者なのだ。手がけた本が出来上がる度に、いつ誤植の指摘が来るかとヒヤヒヤしたものだ。そんな誤植コンプレックスが本書を企画した真の動機かもしれない。

本書には誤植のケースが数多く出て

くるが、中でもクスツと笑える一番の実例が作家、中村真一郎のエッセイ中に最初に引合いに出された一件である。中村氏の恩師であるK先生から西洋哲学史の翻訳本を献呈され、早速「とがき」から読むと、その出版が遅れた理由に「筆者の個人的情事から」とあったので驚いた。むろんこれは「事情」の誤植だが、謹厳で知られている先生だけにひと事ながら顔が赤くなつた、と言う。当時の私はこのK先生とはどなただろう、とは思ったが、深く探究もせず長く不明のままであった。

ところが、最近、新刊で珍しく買った元国書刊行会の編集長、磯崎純一氏の回想録『幻想文学怪人列伝』を読んでいて、アツと驚く箇所があった。磯崎氏は田辺貞之助氏が東大教養学部フランス文学教授を退官後の晩年、氏に仏幻想文学の翻訳などを依頼して足繁く自宅に通った。先生は大へん気さくな方で話もめつぼう面白かった。

その座談中に誤植の話が出て、一番先生が愉快だったのが、同じ学部と同僚教授で友人の川口篤君のそれ（前述の実例）で、「カタブツの川口君はそういう艶福からほど遠い人だから、われわれ友人たちはみな腹を抱えて大笑いしたもんだ」と語ったと言うのだ。川口氏はジイドの『狭き門』を始め、ゾラやポーヴォールなどの名翻訳が多数ある立派な学者だが、昭和五十年に亡くなっている。私はこれを読んで、もし田辺氏の「とがき」だったら、読者もさもありなん、とさほど抵抗なく受け止めたかもしれない、と思つた（笑）。田辺氏は数々の仏文学の翻訳の他に、日仏の艶笑談を紹介する本も多く出しているからだ。

この傑作誤植が生まれた事情は今となっては分らないが、本文の翻訳は何度も慎重に校正したものの最後に書いたあとがきはホツと気が抜けて校正ゲラを一読し、うっかり見逃してしまっ

たのかもしれない。あるいは印刷を急いだために、とがきだけ校正を担当編集者に任せられたのかも（あくまで推測ですが）。ただお名前はやつと判明したものの、川口氏のどの本に当るのかは依然として不明である。著作リストの中にクレツソンの『フランス哲学思潮』もあがっているのだから、当書かとも思うが、怠けてまだ確認していない。

余談が長くなってしまったが、最近ではフリー校正者の牟田都子さんが、様々な関連本を紹介しつつ、このテーマで味わい深いエッセイ集『文にあたる』を出され、好評で増刷を重ねているようだ。また、しばらく前に私は古本屋で珍しい胡蝶豆本の上下巻、田中栗さんの『美しい校正』を見つけた。彼女もフリーの校正者で、主に平凡社と集英社の仕事をしている方だ。二冊とも72頁の薄い本だが、校正の手順を紹介しながら、その苦労や注意点を綴っており、私もいろいろ教えられた。

そのごく一部をあげておく。例えば人名や会社名は要注意で、「富士フィルム」は「フイルム」が正しく、「キヤノン」も「キヤノン」が正解だ。また「平凡社」の「平」は実は上部が「ハ」の形の旧字が使われている。確かに改めて出版物を見ると、その通りである。さらに読者には殆ど気にならないものの、校正者にとって難物なのは、カタカナの「へ」とひらがなの「へ」の微妙な区別である、とも。私は恥ずかしながら、これらの事実を知らなかった。

私はかなりの機械音痴のくせに、知人に教えられて、半年ほど前から時々Xへ投稿しているが、その文章を後から見返すと誤植のオンパレードで、その都度、附記で訂正して読者に謝つてばかりいる。終いには「誤植王」と自称して自虐ネタにしてしまう始末である。穴があつたら入りたいが、どうしようもないと諦めています。

# 五月集

岩村知康 長崎

早春の野畑になす畦の木の伐採さらにかづらの根掘り  
畑あぜに姉が植ゑたる果樹伸びて耕作区域に日の陰をなす  
秋蒔きの大根・蕪のおほかたは取り終へあとは花咲かせをり  
隣接のみかん畑の黄なる果は一つ残らず収穫されたり  
秋の日は黄に実りゆく伊木力の山ながめつつ農作なせり  
畑仕事終ふる帰りの寄り道の楽しみのありみかん直売所  
直売の中晩柑の新品種その名など知るみかんの里に  
この里に仰げる山の頂上に山本健吉の歌碑を訪ねゆく  
健吉の伊木力みかんの詠進歌その歌碑の建つ琴ノ尾岳に

藤田夏見☆ 広島

豊島産坂の尾道因島友らにいただく今年の八朔  
爪草と雀の帷子カタバミと庭に冬越す強者を抜く  
水嵩の増えたる溜池さざなみに群れて漂う子連れの鴨ら  
菜種梅雨手持ち無沙汰に仇討ちの名に惹かれ入る映画館の闇  
飯を炊き味噌汁を煮て湯灌もす喪主を支える組み内ありき

組み内に今年五件の回覧板「家族葬にて」皆みな親しき  
会計と月に二度なる回覧板三月までの町内会役

肝臓に癌の出来たと告げながら公園の木伐るボランティアの友

東ミチ 青森

正月に生けし花々挿し替へる間もなく弥生桃の枝選る  
屋根の上のテレビアンテナを巻き込んでうづ高き雪がずつしり落ちる  
例のなき豪雪の冬さりゆけば被害現はる軒にも庭にも  
スーパで久しぶりに友の話聞くあの三人が痴呆になりしと  
案の定セールの棚にうつされる菜の花買ひて器に活ける

加藤富子☆ 栃木

一日の仕事を終えて若きママは今夜の献立に頭悩ます  
更衣室の若きナースはすべてに迅速私にかまわずお先にどうぞ  
子等が待つ家庭の主婦に変身す五時半からの看護師仲間  
難聴に視力障害者は孤独の世界白寿の媪は日々リハビリす  
利用者の先輩からの一言は可愛い声ねと励みの言葉  
沖繩の友より届く写メールは梅と桜の春の訪れ

奥山清子 山形

窓あけて「冬の星座」を口遊ぶ凍て付く空にオリオンのなし  
日本海側一週間の大雪警報息子の帰省叶はぬ越年

のしのと雪降る午後に息子より届く宅配潮の香ほのか  
春立ちて寒さの緩む昼下がりに高屋根の雪ドドと転ける  
母の形見の師範の時の羽織着て若い振りして歌会に臨む  
筆筒よりまだ八十代と出すセーター二度躊躇ひてさつと着る赤  
近すぎて言葉少なに過ぎしかと悔いつつ夫の遺影に語る  
助手席に笑顔の遺影鎮座させ「気をつけます」と今日のはじまる

安川 敏 子 ☆ 埼玉

八重の百合やさしいピンク華やかに友より届く生日の席に  
高齢者オレンジカフェの集まりで子供に帰りランプ遊び  
脳トレに両手を開き右左グーチョキパーと逆をつづける  
年明けてデイスービスの一月はおみくじ引いて皆で楽しむ  
市田柿酒につけこみデザートに高級和菓子のような味わい  
いつか行く老人ホームか冊子見て自由な日々を大事に過ごす  
暖かい甘栗いただき思い出す小布施の茶店や街並などを

松崎 みき子 岩手

浜風の肌寒い日に岸壁にワカメ収穫の船並びをり  
老体を浮かせて舵をとる叔父の船は幾日も朝陽に向かふ  
磯浜で採れたる岩海苔珍しく佃煮にして香りごと食む  
古びるて廃墟となりたる山際で友と立ち会ふ雨の軒下

半島の道荒れ果てて春になる山鳩だけは機嫌よく居て

高藤 朱 美 ☆ 茨城

沙羅さんの胸に輝く銅メダル笑顔戻りて我もほつとす  
真っ白なミラノ大聖堂は眩くて子らと扉を叩く日を待つ  
デビュー時の坂本花織孫に似て最後の滑りを動画に残す  
到着日子らに確かめクッキーの届く日までの時を楽しむ  
振袖の孫達の写真見くらべる同じ衣にちがう輝き

三十年育てし巨峰を片付けぬ庭じまいするも淋しさのあり

梶尾 栄子 兵庫

仰向けのがが顔近く覗き込む顔あり虫歯の治療する医師  
細き枝交差する枝迷ひつつ柿の剪定寒さの中に  
寒肥を施し不要の枝を伐る大きな柿の実生るを願ひて  
珍しく凧揚げする子の凧三つわが畑の上空侵犯しをり  
未だ草の勢はぬうちにと指先の冷たさ堪へ小ささを引きをり  
杖つきて成形外科に來し嫗のラメ入りカーディガンは皆の目集む  
資料揃へ説明通りに書きゆけば確定申告こと無く終る  
操り返し眼より耳より入り來たる戦争用語いつしら覚ゆ  
番付の三段目より這ひ上がる朝乃山にエールを送る

(☆印は新仮名遣い希望者です)

感動の失せて来たりて形のみ屑蘇波み  
交はずことも終はりか 益坂順子  
これまで続けてきたことを、そろそろ  
終わりにしようかと思う時がある。一抹  
の寂しさを感じながら。その一方で、ま  
だ続けられると思ひ直したりする。この  
歌を読んでそんな葛藤を思ひ出した。

友よりの土産は色よき蜜柑二個紅まど  
んなのラベルつきをり 同

最近はずっと新しい品種の果物が出回  
るようになった。消費者の心を引き付け  
る魅力的なネーミングで。この紅まどん  
なも一個ずつラベルが付くブランド物。  
高価だろうが、食べてみたくなる。

日記買う神も知らない明日を買う師走  
に何時もの本屋に行きて 児玉孝子☆  
年末に新しい手帳を買う時は、何とな  
く心が弾む。この作者も同じような気持  
ちだろう。何時もの本屋に行つて日記を  
買っているが、それは明日を買うことだ

と言う。なるほど、そうかも知れない。

赤い服のサンタクロースに泣いた児を節  
分の鬼は待ちわびている 藤田英輔☆

幼い子には赤い服のサンタクロースが  
怖かったようだ。泣かれてしまった。今  
度は節分。多分、鬼となるであろう作者  
は心待ちにしている。読んでいて楽しい。

駅ビルの閉店三日前にして混み合いて  
おり寄らずに通る 安川敏子☆  
駅ビルの閉店が近づいている。作者も  
ずいぶん利用してきた所ではないだろう  
か。これまで身近にあったものが無くな  
るのは何となく寂しい。

「百までではたつた三年」とふ姉と天麩  
羅蕎麦をゆつくり食べる 奥山清子  
仲の良い長寿の姉妹。「百までではたつ  
た三年」という言葉に驚く。二人でおい  
しい天麩羅蕎麦を楽しんでいる。静かで  
睦まじい時間が流れている。

干支などの木版画刷り手書きなる賀状  
出したり三十余年 岩村知康  
近頃の年賀状事情を詠んだ一連の歌の  
なかの一首。かつては年賀状を出すのが

当たり前だった。作者のように、木版画  
で作った素晴らしい賀状もよく見かけた。  
でも今は年賀状離れが急速に進んでいる。

ジャム作りやうやく終へて今日からは  
大根切りてペロ干し作る 羽田孝輝  
ジャムを作り終え、今度はペロ干し。  
「ペロ干し？」と思ひ調べてみた。大根  
をペロのような形に切つて干す保存食  
で、身欠きニシンや昆布と煮るとおおい  
いとか。その土地に根ざした豊かな生活  
が垣間見える。

夫へと編みし初めてのアラン柄色褪せ  
ぬまま半世紀経つ 塚本節子☆  
アラン模様の編み方をユーチューブで  
見てみた。気の遠くなるような作業だっ  
た。作者も一目一目に思ひを込めて編ん  
だのだろう。貴重なものだと思う。

来る度に皆で並びて背比べ年の初めの  
息子の一家 首藤文江☆  
みんなで背比べしている微笑ましい情  
景。来る度にお孫さんは大きくなってい  
ることだろう。それを見ている作者の嬉  
しそうな様子も目に浮かぶ。

三月号 十首選

冬雷集

須藤 紀子

三月集

中村 哲也

「たたいまと言ひてをみなの家「いね」  
と思ふ東の間ふいに 大山 敏夫  
カーテンの隙より覗く朝空に光冷たき三日月  
のあり 森藤 ふみ  
炊きあがる七草粥を神仏に供える今朝の寒の  
敵しき 吉田 綾子☆  
茫として流るる時間の快き袖の香ただよふ湯  
に浸りぬて 山口 嵩  
のど食道胃の腑を辿りてゆつくりと一杯の白  
湯は身体に沁みいる 高松美智子☆  
獅子頭担ぎてをとこふたりくる四条大橋雪舞  
ふなかを 天野 克彦  
悩み事ほつりぼつりと打ち明けて坂のぼりゆ  
く海を見るまで ブレイクあざさ☆  
もう一度カマキリの孵化を見てみたし奇跡の  
ごときあの瞬間を 山本 三男☆  
世の中はクリスマススイブさりながら仕入れの  
入力作業に追はる 中村 哲也  
稜線に数多の雲を掃きよせて早々沈む冬の入  
り日は 田端五百子

蟬梅と山に折りたる松と竹つぼのとのふ南  
天添へて 益坂 順子  
庭に咲く季節外れのつばき黄をかかげる  
り小寒の季 益坂 順子  
日記買う神も知らない明日を買う師走に何時  
もの本屋に行きて 児玉 孝子☆  
夕暮れの光を浴びて老いてゆくように縮まり  
木に残る柿 藤田 英輔☆  
松の内過ぎて静まる一月の氷川の社に初詣つ  
づく 安川 敏子☆  
蓄音機バイクに積みて来る彼に初めて習ひし  
テネシーワルツ 奥山 清子  
家族などの写真画質も向上し貰ひてうれし数  
多の賀状 岩村 知康  
軍艦の握りの小ぶりに世相知る腹も八分目こ  
れも良きかな 羽田 孝輝  
銀行の入口に貼らるるポスターの謹賀新年消  
えて寂しむ 塚本 節子☆  
最初だけ気持ちを入れて丁寧に文字を書き込  
む新しい手帳 首藤 文江☆

島木赤彦研究会入会案内

- 島木赤彦研究会は昭和45年に設立。  
支部は昭和49年に長野県支部とし  
て設立。
- 会長 高橋 克
- 島木赤彦研究会は、近代日本文学  
および、近代教育における島木赤  
彦の業績の資料保全と、調査研究  
を目的としています。
- そのための研究活動として、研究  
大会の開催・資料展示会・東京例会・  
支部研究会などを行っています。  
投稿などの機会が得られます。

●(年会費二五〇〇円)

●本部事務局

江戸川大学 中島金太郎研究室内  
〒270・0198

千葉県流山市駒木四七四  
☎ 〇四(七二五二)〇六六一(代表)

ゆつくりと身の隅々までが熱くなる造  
影剤を打たれたる後 梶尾栄子  
検査のための造影剤を打たれ、横た  
わっている体に薬剤はゆつくり浸透して  
ゆく。「身の隅々までが熱くなる」に、  
浸透していくリアルさがある。

笹舟の流さるるやうに七十八年気づけ  
ば父の享年を超ゆ 佐藤幸子  
生業に精を出し、真っ直ぐ前だけを見  
て生きてきたことを言う上の句だろう。  
ふと気が付いたとき、父の享年を越えて  
いたところに感慨が込もる。

節料理セットで購入し年末は手持ち無  
沙汰で申し訳なし 山本述子  
節料理は主婦が台所で作る世代の筆者  
には、「申し訳なし」の気持がよくわかる。  
時代が変わったということである。

へタが取れた今年の柿の皮をむき干物  
の網に入れて干したり 卯嶋貴子☆  
干柿はへタを縄の網目に刺して干す

寒き日のストーブに置く黒豆の匂ひの  
中にモチーフ編み継ぐ 梶尾栄子  
石油ストーブだろうか、ストーブの上  
に置いた鍋から黒豆の匂いがしてきたが  
まだ煮えてはいない、そのそばでモチー  
フを編みながら煮えるのを待つその姿が  
見え黒豆の匂いまで。

冬雷誌一年分の十二冊から吾が歌纏め  
一冊にする。 東 ミチ  
作者の短歌への熱い思いが伝わって  
くる。ご自分の歌を纏めてあればその時々  
の自分に逢うことができる。

年始代はりと姪より届く「不知火」の  
箱に幼の絵手紙の添ふ 佐藤幸子  
「不知火」はポンカンと清美オレンジ  
を掛け合わせた果物とこの歌に教えて  
いただいた。姪御さんへの感謝の気持ち  
が伝わり、姪御さんのお子さんだろうか、  
その幼い子の書いた絵手紙を読んでいる  
作者の笑顔がみえるようだ。

が、へタが取れては干しようがない。苦  
肉の策に干物の網を使ったところに生活  
実感があり、情景が目には浮かぶ。

ストーブの炎は優しく暖かし昭和の遺  
物と娘は笑う 加藤富子☆

薪ストーブなのだろう。炬の窓から見  
える炎は柔らかく暖かい色。ストーブの  
炎の色から昭和を懐しむ思いが伝わる。  
咲き染むる赤紫の小さな花窓辺に鮮や  
かデンドロビウム 野口秀子  
デンドロビウムは、花の色も形も大  
きさも多種多様で美しい。ここでは赤紫  
の小さな花だが、窓辺を彩って春を待つ。

突然に腹痛覚え高熱も主治医のまなざ  
し陰しく感ず 小嶋知葉☆  
突然の腹痛に不安を抱える作者に、主  
治医の険しい表情は、不安をさらに掻き  
立てただろう。逼迫した状況で捉えたも  
のが大きい。

平城宮跡に共に立ちしを思ひ出す夫の  
透析決まりたるとき 井上鈴子  
健康で遠くまで旅行に行つた思い出  
を、病を得た日にふと思出す。状況の

セーターは枝ぶりの良き五葉松にかた  
ち整えふわりと干せり 藤田夏見☆  
セーターの干し方は意外と難しいが作  
者は五葉松の上に干すという、その発想  
と干し方に作者らしさを感じる。

ミカンの実少し生つてる野鳥らが食、べ  
るようす楽しそうだな 早乙女イチ☆  
庭のミカンを食べている野鳥を楽しし  
うだなと詠み、その野鳥をみている作  
者も楽しそうに読む側もその野鳥を想像  
して楽しくなる。

初つ端より携帯電話に悩まされあらぐ  
ことなきことしの正月 松居光子  
携帯電話は年齢に関係なく持っている  
時代でとても便利だが新機種が次々と  
できていく。新機種に悩まされている作  
者に共感を覚える人は多いと思う。

修道院の休暇とれたとラインありてべ  
ランダに干す長女の布団 加藤富子☆  
久しぶりに帰宅の娘さんを迎える母親  
のよろこびが下の句の動作に表れてい  
る。娘さんとご家族の笑顔がうかぶ。  
本年も一人お節がそれぞれに娘夫婦の

異なる上の句と下の句の構成に、憂いの深  
さをうまく表した。

ゴツゴツでなめらかさ欠くもわが餅は  
ぶつくりかりつと甘味もありて 高藤朱美☆

ゴツゴツでも滑らかでなくても、自分  
で搗いた餅の味は格別だろう。下の句は  
美味でありかわいらしさもある。

大吉と決めて一年過ごすなり呑気に構  
えておみくじ引かず 金子八重子☆  
楽天的で大らかな性格が伸びやかに詠  
まれ、読む側も幸せな気分。「おみくじ  
引かず」の潔い結句に惹かれる。

太りたく胃にいっぱい食べたれどわ  
が体重は変わらず増えず 立石節子☆  
か。世の中体重が増えて困る人も多い中  
で、願望は人それぞれに異なる。

歳だから仕事やめると妻は言う仕事辞  
めれば寿命縮まる 山崎 猛☆  
仕事一筋に生きてきた男の姿がある。  
家族の心配をよそに、わが道を行く力強  
い生き方を詠んだ下の句が潔い。

粹な計らい 小嶋知葉☆

母親も一緒に楽しめるようにと一人お  
節を人数分持つてきてくれた娘さんご夫  
婦の心遣いに感謝の気持ちがよく判る。

白内障術後の視界はクリアなり今年の  
一文字「眼」と決める 金子八重子☆  
最近白内障の手術をした方の話を  
聞くことが多く皆さんよく見えるよう  
になったと言います。今年の一文字を「眼」  
と決めた作者の感謝の思いがよく判る。

千二百段ガイドと仲間の励ましで無事  
に登りて岩山に立つ 井出裕子  
スリランカのシーギリアロックの頂上  
に挑み、励まされながら千二百段の階段  
を登り切ったよろこびを詠み、岩山に  
立って眺めた景色と頂上の遺跡を観てい  
る感動が伝わってくる。

ふるさとの訛りで集う同窓会名札をつ  
けて遠き日もどる 山崎 猛☆  
ふるさと訛りで話ができる喜びを詠み  
何年ぶりかにあった友の名を名札に思い  
出して話が尽きない楽しい同窓会を詠  
む。

# 作品二

大山 敏 夫 埼玉

昭和十九年生まれに続く訃の報せわれに迫り来る何かの報せ  
訃の報せ永眠といふ語がひびき二度三度読み身に沁み渡る  
勤めろし日より続けてなほたたかふ不眠症われの重たき躰  
ぎりぎりまで堪へて已む無く飲む一粒睡眠導入剤と続くつきあひ  
勤めてゐる身にあらざれば眠れずとも何とかならむ二、三日なら  
青信号を待つ間に墮つる瞬の眠りあれは十秒ほどのことかも  
眠りてはならぬ時ほど眠く眠く椅子より落ちて頭を打ちぬ  
「老」一文字「らうもう」と読みこれ即ちボクだと笑へど誰も笑はず

松 居 光 子 三重

空中でくるくる廻るスノーボードまるでサーカスを見てゐることし  
軽々とパートナーを持ち上ぐるフィギュアスケートペアの支へ合ひ  
四年ごとにレベルアップするオリンピック人の力の無限を知らさる  
午前八時休日の電車がら空きでいうとうと座り名古屋まで行く  
春浅き今朝の冷え込みダウンコートの人あり薄きコートの人あり  
久し振りに眼科の医院で出会ひたりスパーでよく挨拶せし人と

益 坂 順 子 福岡

「母さんの留袖着たい」と娘の言ひて三十年経たるたとう紙ひらく  
結婚式の招待受ける喜びに苦痛の混ざる齡重ねて  
「おばあちゃんとの山登り忘れないよ」孫の筆跡宴の席の  
晴れの日の二人に贈る高砂を謡ふ夫のマイクを持ちて  
青空の広がる山の頂に会話の弾むコーヒータイム  
数回の休息入るる急坂にひとときは高き鶯の声  
この年の侍ジャパン見れずともラジオ聴きをり厨に立ちて

山 本 述 子 神奈川

満開の河津桜春日浴びうつとり眺めしばし佇む  
鶯の声高らかな公園にシニア戯るグランドゴルフ  
送られし「せとか」の甘み上品で日毎楽しむ至福のひとつとき  
同期会集ふ人数減りたれど親密度濃く次回も期する  
災害は忘れた頃にやつてくる我が家の備へ再チェックする（三・一一から十五年）  
幼き日雛段前に家族らと笑ひ合ひたるひとときのあり

卯 嶋 貴 子 ☆ 東京

貼るカイロ背中二つつけていて寒さを凌ぐ二月一日  
家の中に取り込んだ観葉植物が寒さ緩みて元気になりたり  
三回も風呂場で倒れたる夫は頑として介護サービス受けぬと言えり

早乙女 イ チ☆ 栃木

キンカンの高枝伐らず今朝見れば黄色くなつてそよ風ゆらす  
ミカンの木の下に咲いてる菊の花むらさき色の爽やかな花

児 玉 孝 子 ☆ 愛知

温泉に行こうと娘が誘い呉る不安のあるも心決めたり  
富士見台ロープウェイにアルプスの雪の連山眼に写す  
四方囲む山より朝日今昇る昼神温泉の残雪の朝  
発疹に体の痒み我慢ならず診察受けて加齢と言わる  
温む日に数増し咲きたる寒あやめ背くらべして庭の明るむ  
人の声聞きとりにくく耳鼻科医に検査受ければ聴力弱し  
認知症の予防にもよしと補聴器をすすめる医師に頷き帰る

佐 藤 幸 子 山形

玉露飴小袋八ツ橋売る店が落葉払ひぬ醍醐寺の庭に  
秀吉による三宝院の庭園を夫と並びて表書院に見る  
冬空にそびゆる大阪城の天守閣を外人に混じり飽かずに眺む  
冬雷の一冊読み終へ微睡めば車内アナウンスあり「まもなく品川」と  
東海道新幹線終点東京駅近づけば飲み掛けの茶飲み干す吾れも  
透き通る泉のやうなる湯に浸る両眼の濁り取れたる今朝は  
小さくとも芳しき金柑味はひて出でくる六つの種を見つめる

水 澤 タカ子 山形

親鸞様の銅像わきの蠟梅のあはき黄の花ほつほつ咲けり  
山形の今年の雪は少なかりされど雪吊り美しく残りある  
松かこむ石組みの辺につんつんと水仙つのぐみ苔のびくる  
アスパラガスの周りの草を取り除きたく育てと今日は施肥をす  
小六のとき校舎に機銃掃射うけにきあの日の怖さ今に忘れず  
これからも戦無き世を願ひつつ歌よみゆかんペン持つかぎりは

藤 田 英 輔 ☆ 高知

休田は草に覆われ雨染みず力溢れし日々遠くなる  
三月のライオンのごと風は吹き戸の隙間より笛の音する  
言間の季節に入りて強風に蓄は揺れる応えるごとく  
四日前の嵐を知らず梅の花はそよ風を受けこぼれ落ちたり  
晩酌の肴のホタレ三匹とスレッズを見る苦くしよっぱく  
せんせいの「おつかれさま」をまねしつつ帰る幼の手には折り鶴

立 石 節 子 ☆ 東京

紅梅につがいのメジロシジュウカラ鴨飛び来てわれ退散す  
世界中火種の絶えぬ日が続き祈らぬ日なし平和な日々を  
四旬節せめて平和を願いつつわが心にも葛藤多し  
ズームでの会議終りて息抜きし議事確認もオンラインで済む

川越へ月に一度のたのしみは新たな発見ある友の歌  
小四の孫のピアノの発表会練習時より更にうまいね

小嶋 知 葉☆ 茨城

若人の活躍うれしコメントもミラノ五輪に釘づけになる  
前日の失敗見事に乗り越えた「りくりゅうペア」の最高の技  
一日に二万歩ほどを歩きたるイタリアの旅はるかとなりぬ  
一列に咲きたる水仙のまわりにはイヌフグリ青くひそやかに咲く  
幾何学模様に咲きたる水仙眺めつつ思い出したり球根埋めし日  
脳トレとピアノに向かう昼さがりはじめに弾くはいつも「故郷」

津 田 美知子 岩手

リクリユウを「凄く凄く」と連呼する解説を聞き演技に見入る  
早朝の常とは違ふ静寂は出漁出来ぬ濃き霧のゆゑ

静かなれどシーンシーンと聞こゑる人の体の不思議を思ふ

ひな祭りの皆既月食始まれど雲に邪魔されつひに見られず

「一日に一度は笑ふ」と決めてゐる有言実行の夫と私

蕎麦食べむと遠出して来たる店なれど休日の札幌風に揺る

野 口 秀 子 山形

豊かなる髪洗ふの孫はもう二十歳瑞々しくていと柔らかし

二階より遠くに見ゆる雪山のきらやかとなり白く耀ふ

隣家の玄関に聳ゆる桃の花朝日に照りてふんはりとせり

高一の甥の弔辞に噎せ返るもただに静かに眼を閉ぢる

春らしき朝の空は晴れたれど地上に続く戦争憂ふ

京都まで飛び行き夫の納骨す娘に孫に付き添はれぬて

宮城県の大鰯二匹購へり嘗ての茨木思ひ出しては

井 上 鈴 子 山形

雪降ろしの前と後との写メールで雪の多さを姉に知らせる

新しきスコップに冬の日の差して光を弾き雪沈みゆく

食事制限の夫の代はりに子らに送るちよびり苦きバレンタインのチョコ

ふきのたうを庭の隅より鉢にあげ兄の孫らに春を届ける

週末毎のスキーの練習・大会に友は家族で孫を支ふる

スキー場のホテルに泊まる孫と子に友の年金残らぬと言ふ

堅雪をそつと踏みしめ歩く森の木の雪垂れて日の光受く

羽 田 孝 輝 山形

三日前春がそばまで来たけれど一夜で戻り真つ白な朝

けたたましき声に驚き見上ぐれば白鳥飛びゆくごみ出しの朝

月の山眺むるほどに体より力が抜けるたをやかさあり

宇宙にもごみ撒き散らす人類の愚かさ告ぐる新聞見入る

ミラノに集ふ若者もガザ・ウクライナの若者もみんな同じ星に住む者

プーチンの蛮行許し早四年何が正義か分からぬ四年  
午前五時五輪中継観るたびにガザ・ウクライナが重なる二月

塚本節子☆茨城

降り止まぬ雪をまといて紅梅の微かに香り雪に埋もれる  
忽然と庭木の消えて吹雪くあさ南天の実の赤のみぞ見ゆ  
マシュマロのかたちを雪を座らせて庭のブランコ朝の日を浴ぶ  
テーブルの夫の入院の数々の書類書かずに十日過ぎたり  
漸くに入院書類書き終えて明日の晴れをただ願ひおり  
瞬きを忘れて見つむる四分間テレビに釘付けとなりていたりき

首藤文江☆埼玉

採れたての青菜を買いてひとしきり調理談義する直売店で  
待ちわびた図書開館日近づきて心浮き立ち靴を磨きぬ  
病院の隅に置かれた雛人形そこだけ華やぎ心の和む  
足の痛み桜咲く頃治ればと願ひを込めて膝下摩る

井出裕子静岡

人生の最後の大きな旅と決め美術館巡りのアメリカに行く  
美術館八ヶ所巡り巨匠らの名画堪能す飽くることなく  
夕食にタコスを食みてアメリカの移民の文化に触れるも愉し  
帰国日にフライトの欠航報告するガイドに笑みの一つだに無く

フライトの欠航の知らせにメンバーら顔を見合せ無言となりぬ  
市長による警戒宣言雪のためニューヨークの街は人影途絶ゆ  
旅の途でイラン攻撃の報聞きて帰国の不安さらに増しゆく

金子八重子☆千葉

手袋の中にかじかむ指先をグーパーしつつ信号を待つ  
小松菜は寒さに耐えて旨味増し葉の緑濃く軸は肉厚  
道端の沈丁花の香に戻り来て蕾のほころび確かめてみる  
エアコンの上の埃も一掃すノズルの伸びて曲がる掃除機  
初めての倍満アガリに嬉々としてどっぷりはまった健康麻雀  
薬局のクーポン使い損ねたり終日悔しむ三百五十円

山崎猛☆埼玉

仕事後の屋台のラーメン今は無く中華蕎麦屋の暖簾をくぐる  
酒好きの親父の使いで夜の道を焼酎届けし小二の吾は  
ひさびさに「仰げば尊し」聞きてをりこの道選び八十路となりて  
卒業し旅立つ我らに下されし色紙は褪せて師を偲びをり  
遠き日の駅の近くの地下道の傷痕軍人のアコーディオンの音  
子供会の合唱共にしたる友少なくなりぬわが身めぐりに  
世の中に「無情のことは数多あり」母の言葉を思い出すなり  
仕事にて難問越えしのちに飲む酒の旨さよ身を横たえて

大山敏夫

雑誌「時代映画」（昭和35年5月号）創刊五周年記念号は、大友柳太郎が「酒と女と槍」（内田吐夢監督）で演じた富田蔵人高定の姿で表紙を飾り、本文中にも出演に関わる手記を載せている。この映画の原作は海音寺潮五郎で、大友は、

海音寺潮五郎さんの小説は、以前から愛読していますが、「酒と女と槍と」を読んだ時は、主人公の富田蔵人高定の性格が、私にぴったりで、またテーマもはつきり通っていて面白く、一ぺんに飛びついてしまいました。

と述べている。

この人物は実在でその記録をもとにしの色を添えて作られたものであるが、簡単に説明すると、富田は関白秀次の家臣であったが、秀次に謀叛の疑いの起つ

た時に奉行の石田三成にその無罪を主張するが聞き入れられず、主君は切腹に処せられる。

主の切腹に殉じる家臣も幾人が出る中で富田家の親戚らから、お前はなぜ腹を切らぬ、家の不名誉だから追腹を切れと責められる。そこで高定は「主人秀次にお咎めあって家来の我々が罰せられぬはおかしい」と主張し、公開の場で切腹するとの高札を立てる。そしてその日まで身を隠し気に入りたの女歌舞伎の役者左近・采女の二人を呼んでうまい酒を呑もうと企てる。

当日は押すな押すなの見物人、切腹前の高定にぜひ一献献上したいと諸大名らの使いも訪れ、それらに対応しているうちに眠くなり横になって寝てしまう。そして時刻となりいざ切腹という所に来たところで秀吉からの緊急の上意が駆けつける。切腹あいならぬ、それでも腹を切るといふならその罪は親族すべてに及ぶとのものであった。それでも切腹しようとする高定を、今度は親戚一同から止め

よ、思い止まれの手が制する。

結局高定は「切腹もできなかった腰抜け」との汚名を背負うことになる。大友が「私にびつたり」と思いを入れたのはこうした自身のプライドと、それをも簡単に捻じ曲げて押し付けてくる周囲の権力、しがらみ、身勝手、それにも逆らえず無様に生きていく高定の悲しみ、怒りが理解できたのであろう。



画像は雑誌の表紙だが、槍をかつき高笑いする富田蔵人高定は大友柳太郎そのものようである。

映画では片田舎に引き籠り世捨人ふうだった高定を慕い京から采女が来て共に住む。そして時代は動き、秀吉の死、関ヶ原の合戦へと急展開する。高定を高く評価する前田利長に直接誘われ、ついに槍

を取って戦場へ。その時采女の中には高定の子の命が宿っていた、という筋。

詳しくは映画を観るか小説を読んで貰うことにしたい。小説では最後に「と」が付いて『酒と女と槍と』となっている。

大友柳太郎も愛読したという海音寺潮五郎だが、海音寺には、大友同様に短歌を作る芸があり、その作品が『昭和万葉集』にも掲載されるほどだったことを知っていたのだろうか。

その作品数は多くはないのだろうが、海音寺には複数の歌碑さえ建っているのである。一つ目は鹿児島市有村町に建つ、わが前に桜島あり西郷も大久保も見し火を噴く山ぞ

という歌。鹿児島生まれの海音寺には、西郷も大久保もまして桜島はみな特別なのだ。結句がまことに雄々しい。

もう一つ、霧島市牧園町高千穂国民体育地に建つ、霧島は神山なれば谷々に湧く雲さえも尊かりけり

という歌。力強い万葉調の詠みぶりだ。

こういう作品がその土地に建つ歌碑となることは、多くの人にも受入れられる。海音寺は日本刀のコレクションもしており、武士道を重んじたのである。

桜島の歌は『昭和万葉集』（講談社刊）の第十二巻223頁に掲載されている。続く233頁にも、

石鉢の水深ければ縁にゐてかはりこに羽ふる小雀あはれ

という一首も載せる。『昭和万葉集』にはさらに、第十五巻の237頁に、

朝な朝な那珂の川瀬に霧立ちて那須野の夏のすぐるこの頃

が見られる。これは自然詠だが、こうした旅行詠にも優れている。

昭和四十五年五月の船上から佐渡を望んで詠んだ一首、

大佐渡は遠くにありて青みたりひとらの雲山にかかりて

というふうな、対象を簡潔明瞭に捉え、力強い男歌であった。

そういう作家海音寺潮五郎の短歌を強

烈に印象付けたのは、晩年にその伴侶を失った時の作品であろう。

五十余年なれむつびしは夢のゆめひとつぼの灰と汝はなりにしを死とはそも何ぞ刹那に吾と妻を遠く無限に離しけるはや

そらに月つめたき風の夕日町ひたにぞ歩きただひとりにて

なにごとくも変らぬ日々をあけくれは汝がみぬのみぞ汝は逝きにけり

ノンフィクション作家、矢島裕紀彦氏の記事（サライゴ「今日のことば」）によると、「海音寺は酒も強かった。酒量は底なし。飲めばいくらでも飲めたが、家でひとり飲むことはなかった。」としつつ、「そんな海音寺潮五郎が、自らひとり酒杯をあおり、このままだと正体がなくなるのではないかと思うほどの酔態を見せたことがある。それは長年連れ添った妻を亡くしたあとだった。」そうである。そうして挙げられた右の作品を読むと、哀しみ嘆き泥酔して歩み彷徨う姿が痛々しく目に浮かぶ程である。

漱石に不倫を匂わす一句あり全句集読  
み小さな発見 新井光雄☆

夏目漱石の未完の小説「明暗」を思わ  
せる歌です。残念ながら未完に終わって  
しまいました。漱石はこの小説で何を  
書こうとしたのでしょうか。

元旦の祝いの酒は「八海山」義姉のふ  
るさと味は爽やか 越澤太朗☆

八海山という山は新潟県にあります  
が、このお酒はそのあたりで醸造される  
のでしょうか。「味は爽やか」という結  
句に正月の気分浸っている雰囲気がよく  
出ています。

男料理は酒の肴に合うメニュー簡単美  
味のチーズ肉巻き 後藤恭介☆

お酒の肴に自分自身で料理を作る楽し  
さを感じられる作品です。自分の好きな  
食べ物を自分の手で料理して、お酒を飲  
むのは最高でしょう。

しんしんと降り来る雪の積もりたる轍

のあとに冬来るを知る 長谷川 剛

雪の積もった白い道に続いている轍の  
あとが目につかびます。このような景色  
は作者は毎年見ているのでしょうか、今  
年もこの季節が来たのかと新たな感慨を  
もって見えています。

娘より不揃い蜜柑届きたり酸っぱさ甘  
さ混りあう味 長澤千恵子☆

店で買う蜜柑は大きさも甘さも揃って  
いるものが多いようですが、この蜜柑は  
娘さんの所で収穫されたものでしょう  
か。このような蜜柑を送ってくれる娘さ  
んへの感謝の思いが感じられます。

夜明けのやうに明るき障子開けたれば  
月は皓皓と雪を照らしぬ 今野澄子

夜明けを思わせる月の光の明るさが印  
象的な歌です。「皓皓」とという言葉が  
それを表現しています。まだ人々の生活  
の始まる前の無垢の世界の美しさを感じ  
ます。

立ちこめる晩秋の深き朝霧の静寂を見  
等の熊鈴がゆく 松田忠一☆

見事な写生の歌です。晩秋の深い朝霧

のたちこめる静けさの中から学校に行く

と思われる児童達の下げている熊除けの  
鈴の音が聞こえて来ます。そして、その  
鈴の音が移動して行き、やがて児童達が  
行ってしまうと、また静寂に戻ります。  
鈴の音の余韻がいつまでも心に残る作品  
です。

ミニバンの後部座席にかはい娘横須  
賀育ちの小六、小四 児珠純子

ミニバンのスライドドアが開いて後部  
座席に並んで座っている小学四年生と小  
学六年生の女の子の可愛さが際立って  
表現されています。自動車で来ることを  
あらかじめ知っていて、到着を待ち望ん  
でいたのでしょうか。

年重ね諦めることを受け入れる障子の  
張り替え今年はなしに 河原木光子☆

感じられます。昨年までは障子の張り替  
えを毎年行っていたのでしょうか。しかし、  
高齢となつて肉体的に辛くなつて来たこ  
とに伴い、考え方も変化しているように  
思えます。

寒い夜花梨酒を飲み熟睡し薬酒の効用  
実感したり 後藤恭介☆

ご自分で作られたのだろうか。香り豊  
かな花梨酒が浮かび、筆者も飲んでみた  
くなった。かりんのだ餡とあるように喉  
の炎症に効果ありとか、風邪などの感染  
症予防、疲労回復などの効能があるそう  
だ。満ち足りていて読者にも安らぎを与  
えてくれる歌だ。

玄関を開けた途端に「たたいま」と五  
時間かけて吾が子帰省す 長谷川 剛

遠くからサブライズ帰省された息子さ  
ん。車で或いは新幹線です。オートバイ  
で駆けてきたとか？上の句から下の句へ  
と繋がる呼吸が絶妙である。驚きから喜  
びへ。この後は歓迎の宴であろうか。

深深と寒さ身に沁む夜孫と炬燵から出  
て布団に入る 長澤千恵子☆

この歌を読んで子供の頃、年末年始に  
よく泊まりに行った母方の祖父の家を

思い出した。天井が高い座敷を中心にコ

の字型に部屋が並ぶ典型的な農家の家。  
炬燵から出ると周囲はどこも寒かった。  
お孫さんと寄り添って布団に入る様子が  
目に浮かぶ。懐かしくて雰囲気ある歌。

立ちこめる晩秋の深き朝霧の静寂を見  
等の熊鈴がゆく 松田忠一☆

熊と遭遇しないように熊にこちらの存  
在を知らせるため鈴を鳴らしながら歩み  
ゆくといい。威嚇したり銃で打つたりと  
違って思い遣りある習慣と思う。筆者も  
山道を歩いている時、上の方の道をゆく  
人々の鳴らす鈴の音に心惹かれたことを  
思い出した。歌のように姿は見えない分  
ひととき音色が沁みだした。登校途中の子供  
達であろうか。今年には人里に熊の出現が  
異常に多かっただけに。

念願の山形帰郷亡き父母と長兄の遺影  
に手を合はす叔父 児珠純子

二〇二五年九月号に作者の「姫小百合  
もいちど見たいと横須賀の叔父よりメー  
ル届く初夏」という歌があった。衰えて  
遙かな故郷を恋うる悲痛な訴えであつ

た。この度、念願の帰郷が叶われたよう  
だ。息子さんとひ孫さんと共にであるう  
か。作者とも再会できて本当に良かった。  
笑顔見せ見舞いを労う九十二歳二回の  
癌を乗り越えし母 河原木光子☆

転倒して左肩を骨折されたという高齢  
のお母様。大怪我を負いながらも笑顔で  
見舞いに来た作者を迎えられる気丈さ。  
二回の癌を乗り越えて九十二歳となられ  
た。筆者の母も見習って欲しい。

玄関の山茶花ピンクの花咲きて夏の水  
かけ報はれてをり 和田妙子

花の少ない冬に玄関を彩るピンクの山  
茶花の花。雪の白に生えてとても美しい  
のであろう。夏の間ひたすら水遣りに励  
んだ作者の努力が報われた。誇らしさと  
喜びを静かな調べに乗せて伝える。

帰省後の片づけネコの毛がのこる赤い  
セーター笑ってはたか 鈴木裕子☆

猫四匹と母と叔母の住む実家より帰る  
と赤いセーターは猫の毛だらけに。濃い  
色の服ほどより目立つもの。楽しかった  
時間が思い出され笑って落とす作者。

# 作品二

全詩集

新井光 雄☆ 東京

中桐雅夫石原吉郎黒田三郎全詩集どんと三冊並び立ちたり  
気の向けば蒲団の中から手を伸ばし眠れぬ夜の睡眠剤に

中桐は大学職場も先輩で遠くに見るも話しは出来ず

中桐の詩集のタイトル風変り「会社の人事」これで詩集だ

石原はこれまた縁あり退職し二度目の職場に勤務していた

石原の詩は難解で詩の心持たぬ我が身にいささか重し

石原はシベリア抑留体験が重い影なり凄まじきほど

三郎の詩集が我には似合いだらう言葉やわらかほど良き詩情

三郎の全詩集には亡き友の顔思い出す彼の遺品で

後藤恭介☆ 茨城

今年また各紙を買って元旦号の社説を読んで時流を学ぶ

浦和にて次男一家と新年会初雪の道を駆まで歩く

明けの春胃と胸痛く受診する発疹も出て帯状疱疹

ぴりぴりと背と腹痛む冬の夜何度も起きて深く眠れず

回復は時間がかかると一ヶ月の予定はすべてキャンセルにする

折紙の小箱づくりに熱中すチラシ活用で幾通りもの箱  
評判の鰻の店で昼食し妻との会話ゆつくり進む

越澤太 朗☆ 茨城

テントウムシ七つの星を背に乗せて枯草の中一冬越しぬ

ほうれん草の畝作りする昼下り持参の御握り温もりて旨し

種芋は今年も「男爵」期待して肥料石灰多めに入れる

ふきのとう両手に余る収穫を露味噌にする我が世の春と

トラクターはドック入りして養生す老体ならばしばし休めと

「イエローアイコ」厳選品種手に入れて一粒一粒ポットに埋めおり

のらぼう菜ぐんぐん伸びて雨の中花一列の満開を待つ

待望の雨降りしきり牛堆肥の完熟なりて微かに匂う

長谷川 剛 山形

ママの書く候補者名をじつと見る未来の有権者幼子二人

宮殿の東庭に咲く寒椿は奉仕の民の気配りに咲く

もみ上げたる枝を透かして剪定す弥栄祈り皇居の松を

早咲きの淡きピンクの河津桜椿のごとく散り際清し

江戸守る箱根の関所復元の改め婆の形相すごし

昨年秋若木に巻きし菰はづし剪定をへる北国の春

雪残る田んぼに白鳥落穂食べ旨き米食ひ腹ごしらへす

長澤 千恵子 山形

石垣の碧海見つつ数日を風の流れと波音に浸る  
展望台より東シナ海遠く見て穏やかな海の向かうを思ふ  
ビーチには若人達がハンバーガーやビール片手に楽しみてをり  
山間で育ててみると聞きながら石垣牛の焼肉を食ぶ  
グラスボードで海を覗きぬウミガメと珊瑚と魚と見えみて楽し  
一部屋で家族が過ごす五日間嘗てなかつた穏やかな日々

今野 澄子 山形

一人居の姉を訪ねて除雪して手慣れた姿に元氣もらひぬ  
ひひな仕舞ひ寂しくなりたる床の間の啓翁桜に春を楽しむ  
豪雪や極寒に耐へし庭の木の根明け進みて春は近づく  
根開きの微かに見えて青き葉の雪融けを待つスノードロップ  
日ようは出入りする子の声響き老いの二人の活力となる  
ブーツからスニーカーに変はるとき土の匂ひて足下軽く  
地を濡らすふはりやさしき春の雪豪雪の地に別れを告げて  
断捨離の本を思へば悔やみありあの「氷点」を読み返したし

松田 忠一 山形

積む雪に春待ちながら暮らし居る雪国人のこころ慎まし  
雪里を誇り高く生き繋ぎゆくマタギの文化いまそこかしこ

ふるさとを百五十年支え来し母校閉校し「きぼう」の萎む  
集うのはこれが最後と言いなから「傘寿の宴」を幼なじみと  
遠い日への郷愁を掻き立てる夕陽残る雪原あかねに染めて  
最後だと言った先から再びの「桜の宴」の誘い届きぬ  
大いなる希望を呉れる野や山の大地の鼓動雪解けのころ

河原木 光 子 ☆ 広島

朝刊を取りに玄関ドアを出づ冷氣とともに山茶花の赤  
通勤の人がまぎれる駅の中下りの階段手摺を探す  
捜したる電話ボックスの一台は受話器の破損一台は不通  
ふるさとの林芙美子の詩の中に「素手でたたかう」胸に響けり  
二鉢の牡丹の苗木陽をあびて蕾のふくらみ日々眺めおり  
冬雷の友の名地図に書き入れる西日本にはわずか十八人  
その土地の暮らしや名産うかがえて冬雷めくる楽しみのあり  
亡き息子幼き姿の夢に颯ち秋の一日を共に過ごせり

児珠 純子 山形

横浜から転校したといふ友と机並べし小一の夏  
登り棒するする上がる転校生運動苦手のわれの憧れ  
クラス一遠い地区から通ふ友は運動会のリレーの選手  
台詞ある悪女になりし五年生白雪姫の継母の役

若き日の母のコートと青き服解きて縫ひくれし王妃のドレス  
母逝きて娘とふ立場無くなりて高齢者なりわれら世代も  
去年より友は合唱われは歌会に入りて学ぶ楽しさ語らふ

和田 妙子 山形

街並みは変はらざれども旅人の数の多さにただ立ち尽くす  
満員の電車で席をゆづられて異国の人の優しさしみる  
十年の時の速さは知りつつも旅券の写真比べて嘆く

鈴木 裕 子☆千葉

友と行く日帰り旅行に備えつつ楽しさ増してエコバッグ足す  
暖かと寒さ行き来しこの頃は体も迷う三月はじめ

眠りにも良いという茶を買い求め朝の目覚めを少し案じぬ  
花粉多き日と聞くものはまだ平気そう言い聞かせ外へ出で行く

花びらが散れば山茶花花のまま落ちれば椿庭を見て言う

木蓮の枝に一羽のカラス居てつばみのごとく身を縮めたり

ガラスのなか伸びる根の白たくましく開くチューリップ花びらは赤  
リビングをスタジアムにと変えるため意を決しての ネットフリックス Netflix

今 福崎 子☆ 東京

庭の梅今を盛りと咲くを見て梅干作る夢を楽しむ  
春近し土手の桜が色づきぬ今年も会えた河津桜に

川沿いの河津桜は五分咲きで眺めて嬉し生きてればこそ  
病院へ行く日迫りぬ晴天を願うは足元おぼつかなきゆえ  
朝日浴び水仙の花数えんと窓のり出して楽しみに見る  
ぬか漬けのきゅうりさっぱり美味しく明日は茄子の漬かるのを待つ  
食べるだけの楽しみは娘の手料理に次は何かと思ひ巡らす  
暖かな日差しを浴びて思うこと菜の種等を蒔きて育てたし

標高四〇〇メートルの等高線はわが庭隅

を東西に走る

南瓜蔓は三十メートルを伸びゆきて梅の

木にさえ上りつめたり

例えば電気が通じずガスがつかなくなつて

も、昔のものと生活に戻せる庭の力。

アトピーに悩んでおれば山羊を飼いその

乳でつくる固形石鹸

かつては母親が、

半纏や布団を縫うためわが母はカイコ飼

いっつ真綿つくりき

納豆を手づくりするわざ 豆腐ろくを手

づくりするわざ 持っていた母

人のためにも自分たちのためにも。

集落の入口にあるわが家ゆえ花を咲かせ

て迎え入れたり

コキアの森を庭につくって妻はその新緑

と紅葉を楽しむらしも

退職後も忙しい。

退職をすると社会福祉法人の理事の仕事

が待っていたりぬ

わが提唱の「青年会議」から生まれたる

「セルジオ越後杯フットサル大会」

庁議には諮らず稟議書一本で財団法人つ

くると決めき

著者のライフワークか。

週一のそば打ち講習月一の蕎麦打ち講座

こなしてわれあり

二八蕎麦の打ち方教え三十年ブームは去

るかと思えど去らず

(六花書林刊)

歌集 / 歌書  
御礼

編集室・佐藤靖子

■室井忠雄歌集

『わが小園』

令和七年十一月十日発行の第五歌集、  
四八一首を収めている。令和五年六十八歳か  
ら七十歳までの、生き生きとした実生活。「わ  
が小園」の「小」は、小さいという意味でな  
く慈しんで大切にしている園のことで、実生  
活精神生活のすべてを満たしてくれることが  
読めば分かってくる。現在「那須たかはら短  
歌会」主宰。

どのような場所かという点。

■若松 颯歌集

『在の一本気』

令和七年十一月十一日発行、四九〇首の第六歌集である。八十歳代の十年間ほどの作品であり、力強い実生活が作品の勢いとなっている。「樹木」「丹青」を経て「鮎」。自然の歌からは楽しさや希望が、地震コロナ、一強のものたらした悪政への怒り、自身の病氣克服等。

野良や畑から。育てた葱と納豆のおいしい歌ほか。

さつそくに露味噌つくる老婆の技 だれにも言はぬ「縄文」の味  
零余子入りの赤飯炊きて喜び合ふ痛み痒みのなきオベ前夜  
世界遺産に指名される佐渡金山ながめつつ。

谷うつぎ咲く辺りにて老婆待てば潮薫るかぜ佐渡からの微風  
いちめん緑ゆたけく 槩は靴そよがす 我も稔ると  
災害。  
寒冷の能登の人びと顔へつつ避難二日目  
：はや限界ぞ

コロナ禍に死ぬ思ひする医療者の待遇悪化とは//何をか言はん  
一強がみる影もなく去り行くに：今は「悪評」せぬメディア道

邪悪なるロシアのやうな侵略をやドカリはせず相互扶助する  
近頃のトランプ君はブーチンと仲良しのやう：泥棒仲間？

これから。  
九十歳の関所すいすい迫りくるさて何色に染まるとするか

五月の川越歌会のご案内

●五月三十日(第5土曜日)

13時〜16時半まで。

JR・東上線「川越」西口より

五〇〇メートル。

ウエスタ「川越」2階 第4会議室

\*参加希望者はお知らせ下さい。

連絡先 ☎安川敏子 (090-4608-7265)

☎野崎礼子 (090-9971-8149)

(ながらみ書房刊)

短歌総合紙・月刊

年間定期購読6000円(税・送料込)

うた新聞

おかげさまで創刊14周年!

短歌の歴史を踏まえた広い視野と新鮮な企画による独自の特集 全国各地を網羅する歌壇ニュース、実力作家の新作、時宜を得た評論、注目歌集・

歌書の書評、各好評連載等々、毎月内容満載でお届けいたします。

●お申込みは、いりの舎まで

〒一五五〇〇三三 東京都世田谷区代沢五三二五 シェルボ下北沢四〇三  
電話 〇三六四二一八四二六 ファックス 〇三六四二一八五二六  
メール chinon@irinoha.com

三月号 十首選

作品一 石渡 静夫

孫たちの健やかなるを願わんと「夢むすび」なるお守り求む 伊澤 直子☆  
仙如寺の樹齢四百年の大楓一葉も無く散り敷く紅 三好 規子  
テールからつぼのお盆の日溜りに猫をさまりぬちよつと叱れず 佐藤 靖子  
富士山に連なる山の端いよいよに際立つ頃の火の色 齋鹿ミヤコ  
平和とは自分のベッドで眠ること侵略された人等の吐露 植松千恵子☆  
苛立ちし思い何時しか穏やかにヨーガ教室の終わりたる時 川上美智子☆  
強風に煽られ揺れる洗濯物を舞台にラテンを踊る 川俣美治子☆  
ひそやかに時の移ろうこの原にアキアカネ舞ふ夕焼けの色 大野 茜  
清澄の青き空よ抱きとめよけぶりとなりし妹のたましひ 小林 貞子  
山の端に日が沈みゆき晴るる日の残照淡くし 本間志津子  
ばし漂ふ

作品二 大塚 亮子

クリスマス終りて折込み広告の二枚ぼつきり 朝刊軽し 梶尾 栄子  
マイナス七度初売りの朝の品を載せ凍てつく道を産直に向かふ 佐藤 幸子  
大根の瑞々しきを割るようにスパッとほせぬわたしの心 藤田 夏見☆  
着ぶくれて今年の冬は過ごさんと節約をする 卯嶋 貴子☆  
光熱費対策 加藤 富子☆  
修道院の休暇が取れたとラインありてべランダに干す長女の布団 津田美知子  
兄と吾と老いて久々歩く里小走りの吾れ昔と同じ 松崎みき子  
山道に鹿の鳴き声甲高くひと雨来さうな雲がせり出す 井上 鈴子  
可愛げな年玉袋に名を記し夫は子らに渡す日を待つ 高藤 朱美☆  
革ジャン纏いて女孫は颯爽とオートバイにて我家に着きぬ 山崎 猛☆  
籠りにて歩くことなく日が経てば足腰の衰え身に染みて知る

作品三 天野 克彦

我が畑に初雪降りてほうれん草甘味を増しぬ 正月の膳 越澤 太朗☆  
男料理は酒の肴に合うメニュー簡単美味のチーズ肉巻き 後藤 恭介☆  
満州の社宅で我が生まれたとふ母を偲びぬ一月三日 長谷川 剛  
娘より不揃い蜜柑届きたり酸っぱさ甘さ混じり合う味 長澤千恵子☆  
帰りたる孫の残り香あちこちに片付けるたび思ひは募る 今野 澄子  
落ち葉敷く茂吉記念館訪ねゆくみゆきの杜をこころ鎮めて 松田 忠一☆  
少女等の思ひも寄らぬ合奏に遺影の祖父母微笑みて見ゆ 児珠 純子  
年重ね諦めることを受け入れる障子の張り替え今年はなしに 河原木光子☆  
年ごとに数の減りゆく賀状なれど半世紀過ぎて交流続く 和田 妙子  
八十過ぎの母と八十に近い叔母ねこ四匹と今日を生きおろし 鈴木 祐子☆

# 第47回 全日本短歌大会 応募要項

作品 新作未発表に限る 二首一組とし何組でも可  
 応募料 二首一組で二千元  
 現金書留で作品を同封(小為替は無効です)

用紙 B4判四〇〇字詰原稿用紙  
 右半分に下、住所、氏名(よみがな)年齢、電話番号  
 左半分に作品二首

宛先 二組以上応募の場合は一組ごとに前記の通り記載する  
 〒141-0022 東京都品川区東五反田一丁目二五 秀栄ビル二階  
 日本歌人クラブ全日本短歌大会係 (TEL〇三三三八〇一九八〇)  
 令和八年六月三十日 必着

賞者 文部科学大臣賞・毎日新聞社賞・日本歌人クラブ賞・他  
 小池・光・黒岩剛仁・今井千草・大西久美子・菊池裕・  
 佐田公子・高山邦男・山内頌子・森本平・和嶋勝利

表彰式 毎日新聞紙上、及び入賞者への通知による  
 応募者へは大会終了後、作品集を送付します  
 日時 令和八年十月二十四日(土) 十三時  
 講演 高橋源一郎先生(応募者以外聴講料千円)  
 会場 明治神宮 参集殿 渋谷区代々木神園町一番一号

主催・日本歌人クラブ 後援・文化庁 毎日新聞社

◆創業1948年、詩歌と共に77年！ 伝統と信頼の飯塚書店が出版する短歌関連書◆

【最新刊】  
**1000 比喩の短歌コレクション**  
 日本短歌総研編著  
 四六判216頁 1540円(税込)



短歌はレトリックの宝庫です。中でも「比喩」は花形で、古今の名歌の多くは「比喩」に満ち溢れています。本書は「比喩」をいかけた短歌1000を選出。比喩の種類別を明示し難解なものは脚注で解説しました。

**固有名詞の短歌** 日本短歌総研編著  
 コレクション1000 1430円(税込)

**恋の短歌** 日本短歌総研編著  
 コレクション1000 1430円(税込)

**形容詞・形容動詞の短歌**

コレクション1000 1430円(税込)

**短歌用語辞典** 増補  
 新版

日本短歌総研編著 四六上製箱入536頁 4400円(税込)  
 短歌によく使われる用語の説明と著名歌人の作品を多数引用。他に類書のない実作者必携の辞典。見出し語二六〇四・引例歌七三四七首  
 【ご購入はお近くの書店が直接小社まで。歌集出版も承ります。】

後編  
記集



▽新連載の高橋輝次氏のコラムを面白く読ませていただいた。本に誤植はつきもので完璧の出来というわけには行かないのだろうが、出来るなら少しでも減らしたい。校正の仕事には細かいところまで注意が必要なのだと思っただ。

▽永光徳子さんの歌集「陽だまりの庭」がこのたび冬雷短歌会文庫で発行された。ご長女ブレイクあずささんが永光さんに歌集を作ることを提案されたとのこと。一冊にするまで親子で助け合いながら歩まれたようだ。完成おめでとうございます。

▽大山編集長の「大友柳太郎歌集「渚」鑑賞」の補記は大友の出演した映画の原作者、海音寺潮五郎の短歌を紹介している。大友を中心とした映画と短歌の世界がさらに広がりを感ずっている。

(桜井美保子)

▽今月の応接室の客人は三浦武氏である。第一歌集「小名木川」で第三回日本歌人クラブ賞を受けた頃と変わらず、自身の厳しい環境での闘う生き様をうたわれ、筋が通っている。

▽新連載「六回予定」として見開きコラムをジャーナリストの高橋輝次氏に依頼した。今回は校正の誤植の話であったが小誌とも関係深い製本家の田中葉氏の名前が出てきて驚いた。田中氏からはあの大震災の頃に約一年半の間、巻頭用連載を頂戴した。日本豆本協会会長である。

▽拙著「大友柳太郎歌集「渚」鑑賞」は様々な方から読後感が届いているが、歌壇外での、例えばインターネット関連のブログやXでの反響も多く感謝している。ひとえに皆様のお陰。

▽引き続きの小誌の文庫シリーズ「永光徳子歌集「陽だまりの庭」を別冊付録とした。約十年間の作品の自選である。

▽誌面の見易さ化と平等さ化を進めているが、本号から各欄トップの作品を選者三名のローテーションとする。大きな改革ではないが、変化は生じると思う。

(大山敏夫)

▽今月の応接室にお出で下さった三浦武氏は私より四歳年上、若者が学ぶことより働くことが優先されていた戦後の時代を思い出しながら気骨ある作品を拝見させて戴いた。

▽高橋輝次氏の「誤植・校正をめぐる雑談」は面白くて思わず吹き出してしまったが笑えない誤植もあるのて心を引き締めて行かなければ、と改めて感じている。

▽新情報が次々と出てくる「大友柳太郎歌集「渚」鑑賞」を読みながら情報の世界の繋がりに驚いている。

▽永光徳子さんの第一歌集「陽だまりの庭」が完成した。平成二十六年入会以後の作品から温かな作者像が伝わる。読後の感想など著者にお送り下さい。

(小林芳枝)

▽御寄附御礼申し上げます。  
三浦武様

《冬雷規定・掲載用》

- 一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四月一日創立した。(代表は大山敏夫)
  - 一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五の九の四〇九 小林方」に置き、責任者小林芳枝とする。(事務局は副代表を兼務)
  - 一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短歌の道の向上をはかると共に地域社会の文化の発展に寄与する事を目的とする。
  - 一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。
  - 一、長年選者等を務め著しい功績のある会員を名誉会員とする事がある。
  - 一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。
  - 一、月刊誌「冬雷」を発行する。会員は「冬雷」に作品および文章を投稿できる。ただし取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七 大山方」とする。
  - 一、編集委員若干名を選出して、合議によって「冬雷」の制作や会の運営に当る。
  - 一、会費は年額(購読料を含む)次の通りとし、六か月以上前納とする。ただし途中退会された場合の会費は返金しない。
- \*会費は原則として振替にて納入する事。
- A 作品三欄所属会員 一四〇〇〇円
  - B 作品二欄所属会員 一七〇〇〇円
  - C 作品一欄所属会員 二〇〇〇〇円
  - D 維持会員(二部購入) 二六〇〇〇円
  - E 購読会員 八〇〇〇円
- 一、この会則は、二〇二〇年一月一日より執行する。

《投稿規定》

- 一、歌稿は月一回未発表9首まで投稿できる。原稿用紙はB5判二百字詰めタテ型を使用し、何月号、所属作品欄を明記して各作品欄担当選者宛に直送する。原稿用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じる。締切りは十五日、発表は翌々月号。担当選者は原則として左記。
- 冬雷集・作品三欄(メール投稿分)
- ・担当 大山 敏夫
  - ・担当 桜井美保子
- 作品一欄
- ・担当 小林 芳枝
- 作品二欄・作品三欄(手書き投稿分)
- ・担当 小林 芳枝
- 一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏名の下に☆印を記入する。
- 一、無料で添削に応じる。一通を返信用として必ず同じ歌稿を二通、及び返信先を表記した封筒に切手を貼り同封する。一週間以内に戻すことに努めている。添削は入会後五年程度を目処とする。
- 《Eメールでの投稿案内》
- 白地に一まずつべタ打ちにして、行間も空けないこと。頭を一字分空けたり、一首を二行に分断したり、余分な番号を付けたたり、色を付けたりしないこと。分量の少ない場合は通常のメール本文、又はケータイ・スマホでも送信可能。
- 一、Eメールによる投稿は左記で対応する。
- 大山敏夫 tourai-ooyama@nifty.com  
小林芳枝 kysie@nifty.com  
桜井美保子 mhoko496@s4.dion.ne.jp

《選者住所》	大山 敏夫	350-1142 川越市藤間	540-2-207	☎	090-2565-2263
	小林 芳枝	125-0063 葛飾区白鳥	4-15-9-409	☎	03-3604-3655
	桜井美保子	235-0022 横浜市磯子区汐見台	2-2-2-608	☎	090-6029-0590

2026年5月1日発行

編集発行人 大山 敏夫  
データ制作 冬雷編集室  
印刷・製本 (株) ローヤル企画  
発行所 冬雷短歌会  
350-1142 川越市藤間 540-2-207  
電話 090-2565-2263  
事務局 125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409  
振替 00140-8-92027  
ホームページ http://www.tourai.jp



小誌QRコードです。ここから入れます。

頒 価 700 円

今月の冬雷 (冬雷カウンター) 出詠者数の動向				
冬雷集欄	作品一欄	作品二欄	作品三欄	総数
34	29	30	12	105
(+1)	(-3)	(+1)	(+2)	(+1)
* 上記は対前月比です。これは即ち、現冬雷の体力数値と言えます。				